

岩手県埋文センター文化財調査報告書第75集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和58年度分)

昭和59年2月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

発掘調査略報

昭和 58 年度

序

昭和58年度における発掘調査事業は、県教育委員会の指導と調整のもとに、県、建設省、日本道路公団及び滝沢村からの委託をうけた16遺跡について実施してまいりました。

本年度は6～8月にかけて降雨の日が多く調査は難行しましたが、ほぼ計画どおり業務を遂行することができました。

また、昭和55年度から4年間にわたって調査してまいりました東北縦貫自動車道八戸線第7次施行命令区間（一戸町、九戸村、軽米町）に所在した23遺跡の調査も本年度をもって終了となりました。

この調査略報は、各遺跡の報告書刊行に先立ち調査結果の概略について公表することによって、研究者のみならず一般のかたがたにも活用され埋蔵文化財についてのご理解を深めることを目的として作成したものであります。

報告書刊行までには、資料の整理、検討、図版作成、記述等に時間を要しますが、鋭意努力することによって責務を果たしていると思っております。

最後に当センター調査事業にご援助、ご協力を賜りました各委託者をはじめ地元教育委員会や関係各位に心から感謝すると共に今後のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

昭和59年2月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 金子彰吉

目 次

I 県営事業関係

(1) 黄金堂遺跡(岩手町)	3
(2) 手代森遺跡(都南村)	11
(3) 岩谷堂城跡(江刺市)	19
(4) 滝沢城跡(一関市)	31
(5) 川内遺跡(陸前高田市)	39

II 建設省関係

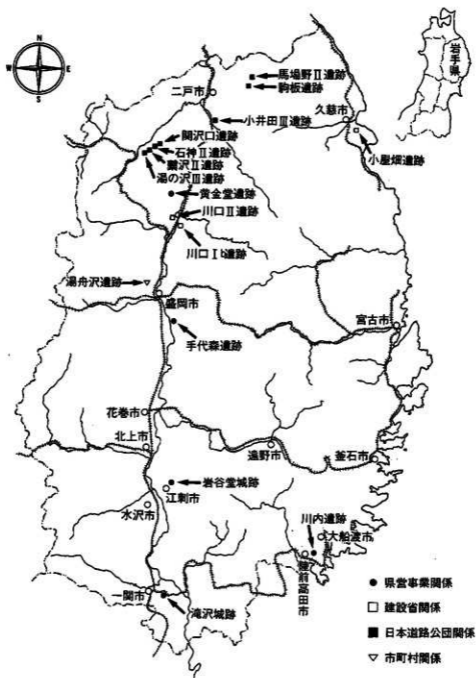
(1) 川口Ⅱ遺跡(岩手町)	49
(2) 川口Ⅰb遺跡(岩手町)	57
(3) 小屋畑遺跡(久慈市)	65

III 日本道路公団関係

(1) 馬場野Ⅱ遺跡(軽米町)	75
(2) 駒板遺跡(軽米町)	85
(3) 小井田Ⅲ遺跡(一戸町)	95
(4) 湯の沢Ⅲ遺跡(安代町)	103
(5) 繁沢Ⅱ遺跡(安代町)	111
(6) 石神Ⅱ遺跡(安代町)	115
(7) 関沢口遺跡(安代町)	119

IV 市町村関係

(1) 湯舟沢遺跡(滝沢村)	127
----------------------	-----



昭和58年度 調査遺跡位置図

I 県営事業関係

(1) 黄金堂遺跡

遺跡所在地	岩手郡岩手町大字一方井第16地割字大森30他
委託者	岩手県岩手北部土地改良事業所
調査期間	昭和58年7月7日～10月7日
調査対象面積	6,900㎡
発掘面積	4,200㎡
遺跡記号	KG83
調査担当者	主任専門調査員 国生 尚 専門調査員 石川 長喜
協力機関	岩手町教育委員会



黄金堂遺跡位置図

1 遺跡の立地

黄金堂遺跡は、国鉄東北本線沼宮内駅から西北西方向約4.3kmにある一方井の集落の中心から北北西方向約1.7kmの所に位置している。

遺跡の位置する一帯は七時雨山(1060m)山麓丘陵に地形区分され、遺跡は高山(429.6m)山地と大森沢(どじの沢)の支流によって形成された谷底平野との両区分にまたがって立地している。

遺跡の名称黄金堂は遺跡の範囲と推定される地区内に黄金堂屋敷という地名のあることから名づけられたものである。この地区には、他に、大日嗣、寺屋敷、コヤシロ(古社?)などの地名もあり、地区の中心地には観音堂が現存している。

昭和44年ころ、この地区の畑から鉄鑿が2片発見されたり、さらに、礎石ではないかと思われる石の存在が2地点において知られるようになり、土師器や須恵器の破片が表面採集できることもあって、黄金堂遺跡は古代の寺院跡に関連している遺跡と推測され今日に至っている。

2 調査の概要

本調査は、当初路線中心線の№223~242+10間の6,900㎡に対して遺構の検出のみを実施することで計画されたものであるが、調査の進展にともない、予想以上に遺構の検出数が少ないため計画を途中で変更することとなり、最終的には調査対象面積6,900㎡のうち、道路や水田部分の発掘できない部分を除き4,200㎡を発掘し、調査を終了した。

調査は標高の低い方からA地区、B地区、C地区に区分された。

A地区は、表土下はすぐ礫まじりの層となり、わずかに縄文土器が出土しただけで、遺構は検出されなかった。

B地区は中央部が凹み、沢状になっているところを尾根状の高い方からブルドーザーで土を移動し、比較的ゆるやかな斜面に造成されていた。

この地区での検出遺構は、竪穴住居跡8ヶ所、焼土遺構4ヶ所、土壇8ヶ所、土葬墓1ヶ所、溝6ヶ所、などである。

A20住居跡はB20住居跡と重複している他に、十二夜に越える道路の下に入っているため全体を発掘していない。山側に壁が残されているが、谷側は床面も残っていない。床面には焼土面と柱穴の一部が検出されている。

B20住居跡は山側に壁が残されているが、谷側は床面も残っていない。5.5×2.5mの床面には地床炉の跡が2ヶ所の他に、柱穴が2組あると推定されるので重複した住居跡であると思われる。一方の隅に周溝が検出されている。

B19住居跡は、5.5×3mの範囲に床面が検出された。壁が山側にしかなく、床面も谷側はないことはここでも同じである。床面には焼土面が2ヶ所あるが、柱穴は山側にだけ検出される。

D16住居跡は、検出された床面は 4×1.5 mの範囲で、全体の一部しか残っていない。山側にわずかに壁が残っている。

D14住居跡、 6.6×2 mの範囲に床面が残る。床面には焼土面が5ヶ所で検出され、柱穴は2組と推定される。土師器の坏、砥石が出土している。山側にだけ壁が残っている。

C6住居跡、検出された床面は 3×1.7 mの範囲である。床面に焼土面が2ヶ所ある。

B5住居跡、床面は 2.5×1.2 mの範囲で検出されている。焼土面は2ヶ所で検出されている。

E4住居跡、約1.8m方形、壁は3面に残る。床面は1.5m方形と非常に小形である。一応住居跡とした。周溝があるが、焼土面や柱穴がない。

焼土遺構は4ヶ所で検出されている。住居跡などの遺構とは別に単独で検出されているので焼土遺構とした。

土塊は、8ヶ所で検出されている。口径は0.9~2.2mまでで円形や長円形などがある。底径も0.8~1.8mまでで、底面の平坦なもの5、検出面と同じく傾斜するもの2、平坦でないもの1、である。断面形は、ピーカー状が5、フラスコ状が1、皿状が2、である。

土葬墓、墓穴の平面は 1.1×0.5 mの隅丸長方形で、穴は斜めに掘られている。遺体は腰や膝を折り曲げて穴の中に直接おしこんで埋葬している。副葬品は出土しなかった。

C地区は、掘立柱建物1、焼土遺構2、などが検出された。

掘立柱建物は尾根状の中腹に、切り盛り約半々の造成によって 9×8 mほどの平坦面を作り、ここに 3×2 間の掘立柱建物をたてている。

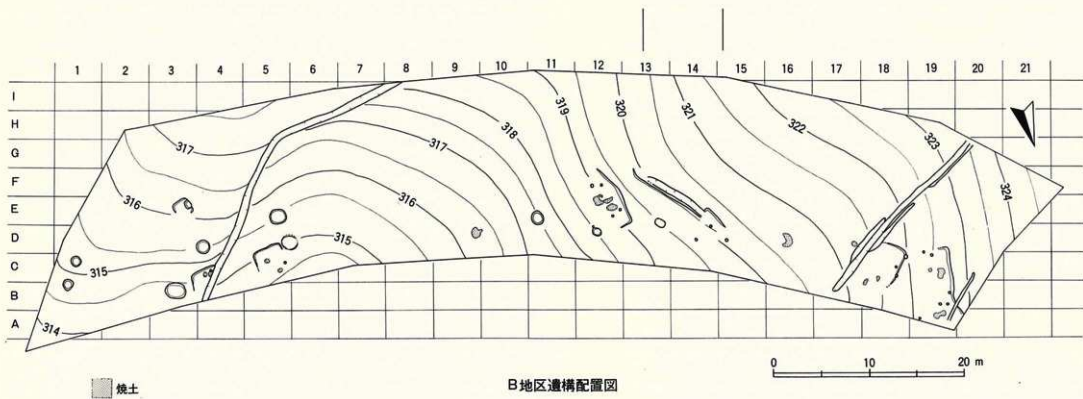
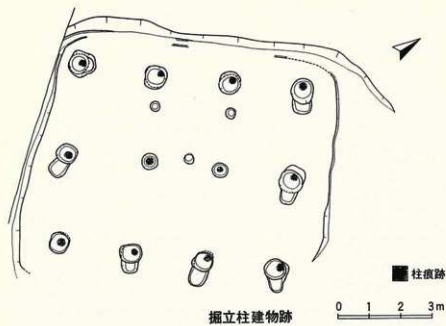
建物は単期で重複はない。地形から判断して東を正面にした南北棟である。掘り方は側柱のものが径0.6~0.7mの円形で、深さは0.8~1.2mと深い。身舎内の2本は径0.5m、深さ0.7mと少し小さくなる。柱径は0.22~0.25mの円柱である。

柱間寸法は、桁行が7.16mで8尺等間、梁行は5.79mで9.8尺の等間と推定される。

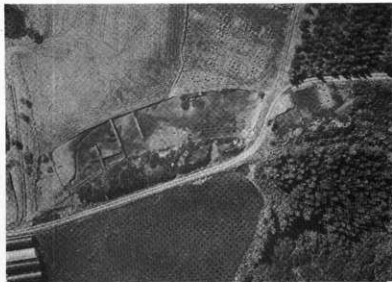
3 ま と め

黄金堂遺跡は寺院跡ではないかと推定されて今日に至った。C地区で検出された掘立柱建物の性格が目ざされる場所である。立地から推測すれば仏堂である可能性は高いと思われる。周辺の地形を観察すると、さらに建物跡の検出される可能性が高い地点があるので、今後の調査が期待される。

掘穴住居跡は、いずれも斜面の山側分だけに床面が検出され谷側は不明である。床面は隅丸長方形で、地床炉やピットがともなうようである。共伴する土器は土師器で、坏は糸切り高台付である。これらの住居跡に共通する特徴として、カマドをもたないこと、焼土が多いこと、などがある。理由は時代的なものなのか、それとも掘立柱建物との関連で考えるべきことなのか、検討を要すると思われる。



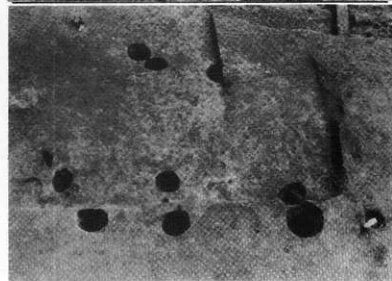
黄金堂遺跡遺構配置図



B、C地区全景



掘立柱建物跡



竪穴住居跡

黄金堂遺跡



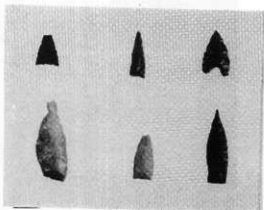
土師器



鉄滓



土師器



剝片石器



縄文土器

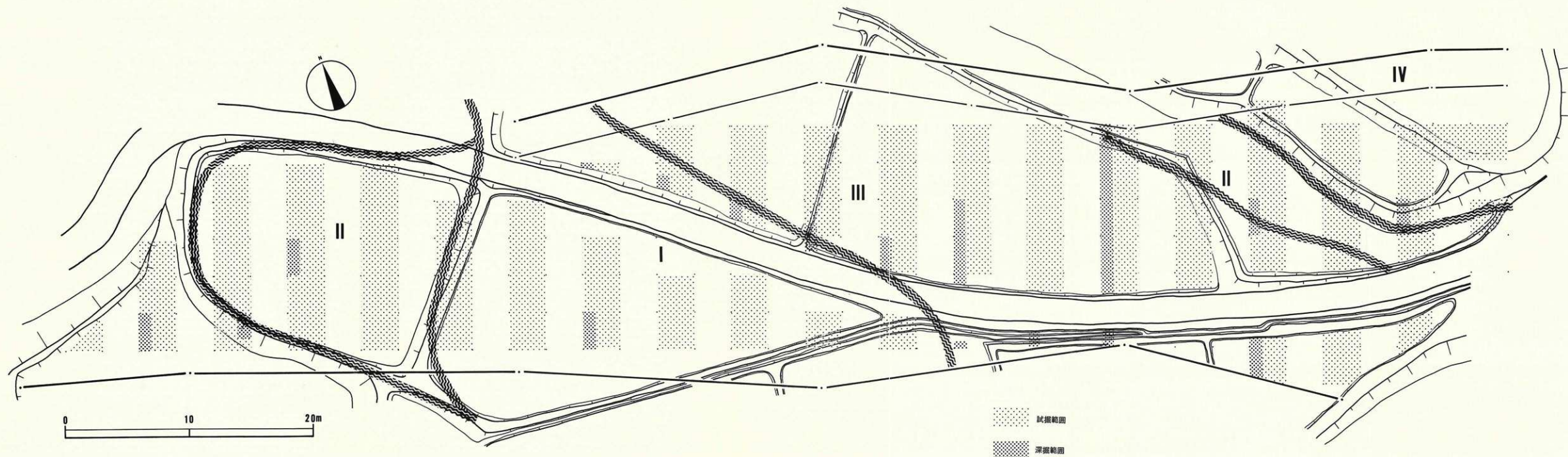
黄金堂遺跡出土遺物

(2) 手代森遺跡

遺跡所在地	紫波郡都南村大字手代森22地割47-3, 61-7
委託者	盛岡土木事務所
調査期間	昭和58年10月17日～11月4日
調査対象面積	2,600㎡
発掘面積	700㎡
遺跡記号	T S M83
調査担当者	主任専門調査員 国生 尚 専門調査員 佐々木 清文
協力機関	都南村・都南村教育委員会



手代森道跡位置図



手代森遺跡試掘範圍

1 遺跡の立地

本遺跡は、都南村役場から北上川を隔て東南東3kmの所に位置する。遺跡のすぐ北側には都南村立手代森小学校があり、東側には手代森保育園がある。北方には岩手山が望まれ、西方600m付近には北上川が流れ、遺跡のすぐ南側を蛇行して流れる大沢川がやや下流で北上川に合流している。遺跡は、鬼ヶ瀬山に端を発して西流する大沢川の扇状地が北上川によって段丘化された地形上に立地している。

2 調査の概要

当遺跡の調査は、北上川水系大沢川の河川改良工事に伴う緊急発掘調査である。今回の調査は、本調査に先だって遺構・遺物の出土状況を把握するための試掘調査である。そのため調査は、700㎡についての表土剥ぎと部分的な深掘作業により、遺物・遺構の検出を主として行なった。

試掘調査の結果、調査地のほぼ全域に遺物が包含され、住居址やピット・埋設土器等の遺構の存在が明らかになった。

遺物の出土状況は図のように、Ⅰ・Ⅱの黒色土の所に多量の遺物を含み、白色粘土等が層間に見られ、Ⅲ・Ⅳの黒褐色土・褐色土の部分は遺物の出土は少ないが、遺構が検出されている部分に分れる。

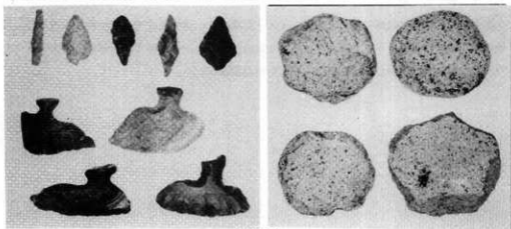
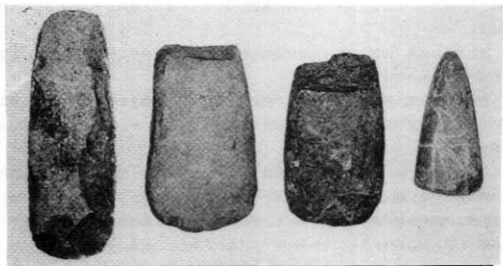
出土遺物としては、縄文式土器片・土製品・石器・石製品・剥片・須恵器片・古銭・鉄製品が得られている。縄文式土器片は晩期前葉の大淵B～BC期のものが主である。わずかではあるが縄文中期や後期の破片も得られている。石器は剥片が大半を占める。石鏃・石匙・石斧・石棒・円盤状石製品等が得られており、中でも円盤状石製品の出土量が多い。

3 まとめ

本遺跡は縄文時代晩期の遺物包含層を主とする遺跡で、遺物包含層の下位及び周辺には住居址やピット等の遺構の存在が確認された。なお当遺跡の全面発掘調査は次年度に予定されており、縄文時代晩期を中心とする遺跡内容の解明が期待される。



遺跡全景



出土遺物

手代森遺跡

出土遺物



手代森遺跡

(3) 岩谷堂城跡

遺跡所在地	江刺市岩谷堂字館下43-1
委託者	岩手県教育委員会
調査期間	昭和58年4月11日～5月27日
調査対象面積	14,320㎡
発掘面積	2,100㎡
遺跡記号	I Y 83
調査担当者	主任専門調査員 国生 尚 専門調査員 石川 長喜
協力機関	江刺市教育委員会



岩谷堂城跡位置図

1 遺跡の立地

岩谷堂城跡は、東北本線金ヶ崎駅の東方約6km、江刺市役所の北東約1kmに所在する。当城跡は小起伏山地（岩谷堂丘陵）の南西に突出した先端部にあり、眼下には江刺平野が広がっている。視界を転ずると北上川の対岸、六原扇状地から胆沢扇状地を一望のもとに俯瞰することができる。

岩谷堂城は、標高115.4mの最高所を本丸とし、南東側が空堀を隔てて腰郭（城代屋敷？）が連なり、人首川の段差へと続く。南西側は西の郭（仮称）、中の郭（仮称）、空堀を経て二の丸となっており、遠郭式山城である。本丸跡は土塁で囲繞され、南西を除く3方には空堀が回っている。現在は杉木立に覆われた八幡神社の境内となっており、延慶2年（1309）の古碑が立っている。二の丸跡はおおよそ東西100m、南北150mの瓢形をなし、広大な面積を占めており、ほとんど岩谷堂高校のグラウンドとなっている。遺存する堀には本丸を囲むものと、二の丸を囲むものがある。本丸では3重となっている部分があり、二の丸では一部水濠となっている。

本城を歴史的に概観すると、鎌倉時代には「千葉系江刺氏が長く住んだ所」と伝えられており、南北朝時代以降室町時代には葛西氏の族臣、江刺氏（江刺郡の総領職）が城主であったと伝承されている。なお、千葉系江刺氏、葛西系江刺氏についての事蹟はほとんど不明である。その後、一時奥州仕置によって木村氏代官の入城となり、江戸時代には桑折氏、古内氏等の伊達家臣が城代となっている。次いで万治2年（1659）には伊達政宗の孫にあたる岩城宗規が岩谷堂城を拝領し、二の丸に居館を構えており、以後は岩谷堂要害屋敷として明治維新まで存続している。

2 調査の概要

今回の調査は、岩谷堂高校の第2グラウンドの造成計画（14,320㎡）にもとづくもので、予定地内における遺構の概要と範囲の把握を目的とした調査である。調査地は岩谷堂城内における本丸と二の丸の間の東側にあたり、岩淵家所蔵絵図による「本毘沙門」を含む範囲である。標高は82～106mで、南端と中央部には東から谷が入り込んでおり、南及び東に傾斜している斜面である。現状は畑地、牧草地、山林で小さな郭状の平地が散見できる。

調査は掘立柱建物跡等の検出が予測されたため幅5mのトレンチ方式を採用し、遺構とその状態の確認を目的とするため地形面に直行するような長短13本のトレンチを設定して行なった。遺構面の把握と下位遺構の検出には幅を1mに狭めて行ない、さらにその下の遺構については0.5m幅を掘り下げて確認している。発掘面積は約2,100㎡となった。

調査の結果、空堀2、井戸2、溝6、橋列1、工房跡（鍛冶場跡？）2、各種土城54、掘立柱建物跡の一部とみられる柱穴329、古代の堅穴住居跡1などが検出された。

〈空堀〉 N2、3グリッド（以下グリッドを省略する）のものは東西方向に伸びる。幅が

1.2 m、深さは0.5 mで規模は小さいが、箱葺研堀状をなす(写真7)。H20、I20のものは幅4.5 m、深さは0.9 m以上で、南北方向に走っている。いずれも完全に埋設していたものである。

〈井戸〉 U5のものは直径1.5 mで、U6のものは2.7×3.0 mを計測する(写真5)。ボーリング棒探査によると両者とも深さは0.7 m以上となる。

〈溝〉 C15、F15、H5、N15の4例は直角に折れ曲がるもので、掘立柱建物を囲むかのように配されている。幅が0.4~0.8 mである。F15、H5は重複している。B11、U4をはじめ他のものは幅が0.2~1.2 mで、東西あるいは南北方向に走っている。

〈溝列〉 Z11で検出されたもので道路に添って南北方向に伸びている。柱穴が接して並ぶものようで一本溝列と思われる。この他には垂直に掘られた幅0.3 mの溝があり(D17)、あるいは同様の溝列かもしれない。

〈工房跡〉 O26、27のものは硬質の焼土と土壌群からなるものである(写真4)。焼土は強力な加熱のため一部還元化されて青灰色をなしている。土塊は直径0.7~1.4 mと大型のもの6個が隣接しており、そのうちの1個から溝が続いている。N7のものは直径4.5 mに灰層が広がっているもので、中に粘土の集積と焼土を伴うものである。両者とも近くから鉄滓が採集されており、一応工房跡としておく。

〈柱穴〉 柱穴は平坦面の存在するほぼ全域から検出されている(64グリッド)。このうち第一次検出面から検出されたものは10グリッドで、1 m幅で掘り下げた第2検出面のものは54グリッドである。そのあり方は群をなして発見される場合が多く、隣接するもの、切り合っているものなどが認められる。特に第二次検出面における密度が高く、D4~6では1 m²あたりの柱穴数が2.3個、H11~J11では3.6/1 m²、C20では4.0/1 m²である。第二次検出面における検出数を平坦面面積で単純に割り出すと0.9/1 m²である。ちなみに、第一検出面のG15、H15



柱穴検出状況(平面)



柱穴検出状況(断面)

では0.56/1㎡である。

柱穴の大きさは0.2～0.7mで、柱痕の判明するものでは0.15～0.2mほどである(挿図)。埋土は調査地点によって多少異なるが、褐色混土～黒色土で、中には炭化物、焼土を含むものがある。整地層の存在する地域においては確認困難なものも少なくない。挿図はたまたま断面において確認されたものであり、詳細な調査によってはさらに増加するものと推測される。なお、柱穴の確認される生活面は、U12、13では少なくとも2面存在し、I15～L15では3面以上が考えられる。

〈竪穴住居跡〉 中世遺構の他には古代の竪穴住居跡がある。O20の斜面において整地層下部から検出されたもので、甍を含む断面が半截された形で残っていた。一辺の長さが3.1mで、煙道の長さが1.0m、壁高が0.4mほどである。

〈出土遺物〉 遺物は、城館跡ということもあって遺構に伴って発見されたものは極めて少なく、大多数のものは表土層か、整地層からの採集である。発見された遺物には土器、陶磁器、金属製品、石製品、木製品、炭化穀類などがあり、土器、陶磁器が圧倒的に多い。これを時代別にみると、近世末期と思われるものが一番多く、次いで輸入陶磁器等の中世遺物、土師器、須恵器等の古代遺物、そして若干の縄文土器である。また、ある程度地域が限定されるものであるが、明治以降のものも散見される。

近世末期のものには、伊万里系染付(写真12の右半2点、碗、皿)、染分け碗などの半磁器、地方産とみられる甕、鉢、壺の類がある。主として表土層出土で、Hトレンチ以西の斜面高位に多く認められる。

中世陶磁器には輸入陶磁器、東海産の施釉陶器、地元産の3様がある。輸入陶磁器には青磁(写真11左半、碗)、白磁(写真11右半、皿、梅瓶)、染付(写真12の左半、碗、皿)があり、瀬戸(写真14)、美濃産(写真13)には卸皿、鉢、平碗、梅瓶、灰釉小皿、天目茶碗、黒褐釉壺などがある。地元産には小型のかわらけ(写真16、直径5.5cm、器高2cm)、瓦質の火舎(写真15)、摺鉢、甕などがある。表土層から出土しているが、整地層や下位検出面からも比較的多く発見されている。地域的には整地層の存在する斜面下位に多い傾向がある。15、16世紀のものを主体とするものようであるが若干さかのぼるものも含まれている。

古代の遺物は土師器、(坏、甕)、須恵器(甕)である。ほとんどのものは整地層の中に細片として混入しているもので、Hトレンチ以東に多い。中には整地層下の旧表土、竪穴住居跡から発見されたものも存する。平安時代に属するものである。この種の遺物は数量的にも多く発見されており、古代の遺構を破壊して築城された可能性がある。

金属製品では大多数が鉄釘(写真21)で、長さが3～15cmの皆折釘である。この他には鍋、釜の類、刀子等利器の類、鉄滓がある。銅製品では古銭(開元通寶、元□通寶、永樂通寶等・写真19)、煙管(写真20)などがある。石製品には茶臼(写真17)、手洗鉢(写真18)、砥

石、硯などがあり、木製品では漆器皿（写真22）がH10の深掘り底部から発見されている。高台内には「大」の字が刻書されている。この他には漆被膜片が数点あり、炭化穀類には米がある。

3 ま と め

今回の調査は、遺構確認調査と限定された範囲の調査であったが、発見された遺構は沢の下流部の一部を除く調査地全域に及んでおり、予想をはるかにうまわる成果であった。

検出された主な遺構は、空堀や掘立柱建物に伴う柱穴などで、当調査地が岩谷堂域内に含まれることは確実であり、主要な一郭を構成していたものと推測される。建物跡に伴う柱穴群はほとんどのものが密集して発見されており、相当量の建物跡が予測される。中には隣接するものや切り合っているものなどがあり、少なくとも数回の建て替えが推定される。その中には柱穴埋土の中に焼土や炭化物の認められるものがあり、火災にあった可能性をもつものが含まれている。これら柱穴群は下位検出面において多数発見されており、出土遺物などからも中世に属するものと思われる。このことは岩谷堂域の築城が少なくとも中世まで遡ることを示しており、城主伝承を考古学的に実証したことになり貴重な発見と言えよう。

また、埋没された空堀の発見や時間差をもつ造成面の検出、重複する生活面の確認などによっては、何回かの大きな変化（縄張りの違い）が捉えられ、岩谷堂域の変遷の一端を読みとることができる。今後の本調査によっては具体的な縄張りの違いや、岩谷堂域の変遷などが明確にされるであろう。

発見された遺物は縄文土器、土師器、須恵器、中世遺物、近世遺物と多岐にわたっており、長い期間何らかの形で使用されたことを示している。換言するならば縄文時代から近世にかけての複合遺跡であると言えよう。

土師器、須恵器の出土状況からすると、古代の遺構は築城の際に破壊されたことが容易に想像されるが、整地層の存在するN20において掘立柱居跡が発見されており古代の集落の存在が推測される。

発見された遺物の中では近世遺物が最も多い。しかし遺構についてはU1、E20の2地点において礎石らしいものが発見されたが、判然としない部分が多い。やはり遺物の量から近世遺構の存在が考えられ、本泉の特に中近世史を解明する重要な遺跡と言えよう。



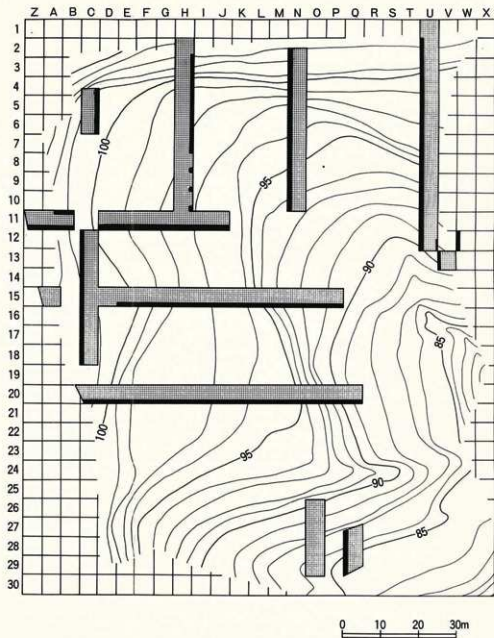
調査対象地

調査地

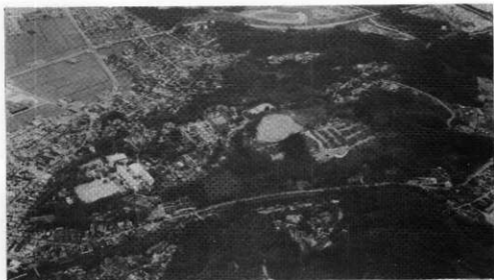
0 100m

調査地

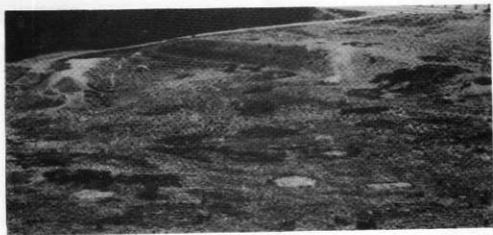
深掘り



岩谷堂城跡調査区域



1 遺跡全景 (航空写真)



2 調査区全景



3 調査風景

岩谷堂城跡(1)



4 鍛冶場跡



5 柱穴、井戸



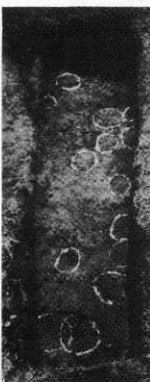
6 柱穴(U11~12グリッド)



7 空堀



8 柱穴(I~K15グリッド)

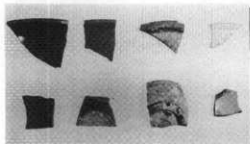


9 柱穴(B・C20グリッド)



10 柱穴(I・J20グリッド)

岩谷堂城跡(2)



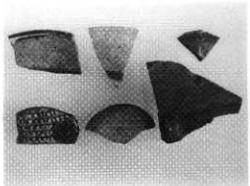
11 青磁・白磁



12 染付



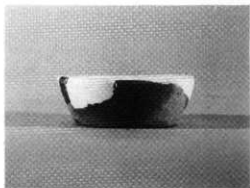
13 美濃、灰釉・天目



14 瀬戸



15 その他陶器

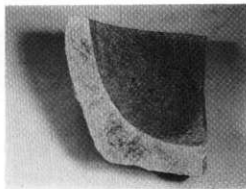


16 かわらけ

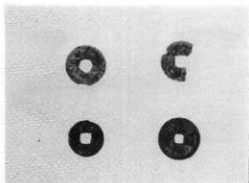
岩谷堂城跡出土遺物(1)



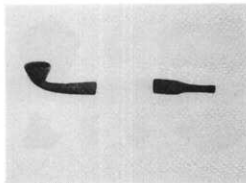
17 茶臼



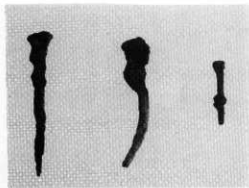
18 手洗鉢



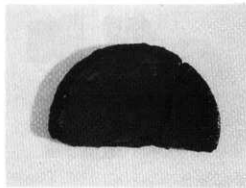
19 古銭



20 煙管



21 鉄釘



22 漆器

岩谷堂城跡出土遺物(2)

(4) 滝沢城跡

遺跡所在地	一関市滝沢字館下1-1
委託者	一関土木事務所
調査期間	昭和58年4月11日～5月10日
調査対象面積	300㎡
発掘面積	300㎡
遺跡記号	TZ83
調査担当者	専門調査員 高橋義介・玉川英喜
協力機関	一関市教育委員会



滝沢城跡位置図



滝沢城跡調査区域

1 遺跡の立地

本遺跡は、国鉄大船渡線真滝駅の約100m南西に位置している。遺跡は北流し北上川に合流する滝沢川左岸の低丘陵（有壁丘陵）に立地し、標高は76m～100mである。有壁丘陵は一関市街地の南方から北上川右岸流域に広がっており、標高は100m前後～200mの高度にわたり、起伏量は小さい。

滝沢城（田中古館）の城主は、仙台領古城書上によれば滝沢三郎左衛門と伝えられている。城（館）の概要は、ほぼ南北にのびる丘陵の最頂部の平場が本丸となっており、一段低い所に二の丸がある。本丸と二の丸の外周にはいくつかの郭があり、北側と東側は急峻な崖を呈している。また西側は土塁が巡り、沢が堀の機能をはたし、南側は二の丸南端部に空堀が切られている。周辺の古城には、狐禅寺城、牧沢城、三関城跡等がある。

2 調査の概要

今回の調査は、急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査である。調査区は城の北東部斜面上にある4段になった平場の内、下の段から3段目までである。平場の規模は、4段目が104㎡と一番大きく、下がるにしたがい小さくなり、平均70㎡となっている。ほぼ平坦で、形状は丸みのある台形状を呈する。各平場の比高差は1と2の平場が1.6m、2と3の平場が2.0m、3と4の平場が3.6mである。現状は杉林であるが、昭和20年代は畑地として使用していたとのことである。

調査区の平場から遺構は検出されなかった。遺物は2と3の平場から丸釘6点、針金状遺物2点、^{かすがい}鋸1点、器種不明な鉄器2点出土している。出土状況等から遺物は、最近の新しいものかと考えられる。

3 まとめ

調査区から柱穴や構列等の遺構は検出されなかったものの、平場は人の手による半切り半盛りされた削平地であることが確認された。これらの平場は本丸と分断する空堀の外にあることからみて、城（館）に付帯した施設かと考えられるが、未調査の部分が多くはっきりした断定はできなかった。未調査の本丸や二の丸は保存状態も良好と思われる。



西上空から

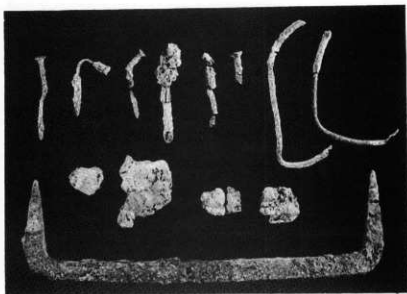


北上空から

滝沢城跡空中写真（1）



東上空から（調査区を望む）

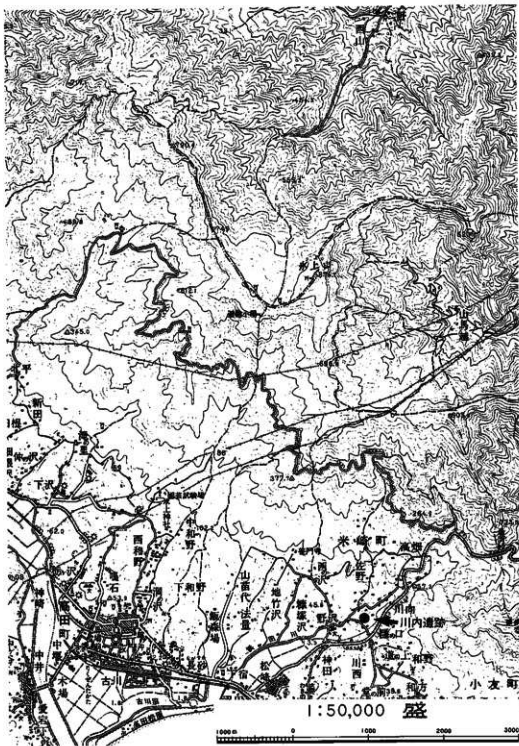


鉄製品

滝沢城跡空中写真（2）・出土遺物

(5) 川 内 遺 跡

遺跡所在地	陸前高田市米崎町字川内97他
委託者	大船渡農林事務所
調査期間	昭和58年5月30～7月7日
調査対象面積	1,000㎡
発掘面積	1,000㎡
遺跡記号	KU83
調査担当者	主任専門調査員 国生 尚 専門調査員 石川 長喜
協力機関	陸前高田市教育委員会



川内遺跡位置図

1 遺跡の立地

川内遺跡は、国鉄大船渡線陸前高田駅から東方約3.6kmの位置にある。

遺跡は木上山(874.7m)の南山麓の陸前高田丘陵上で、浜田川の流域であるが、浜田川の支流佐野川による扇状地上に立地している。最も近い海岸線までは南方に約1.4kmである。

遺跡の現況は果樹園、畑地、宅地などとなっている。南斜面から浜田川方向の南東斜面にかけて、標高31~35mの範囲に遺物が集中して散布している。畑地からは完形の縄文土器や石棒が出土したことがある。縄文土器は中期~晩期までみられるが、後期と晩期が量的には多いと思われる。

2 調査の概要

今回の調査は灌溉水路幅3mで、遺跡の範囲と推定される地区内を約300mにわたって発掘したものである。

水路中心線は調査対象地区は4本の直線によって設計されていたので、これをそのまま西側の直線部分からA、B、C、D地区として区別した。

A地区は薄い表土下は礫層となり、わずかの縄文土器片が出土しただけで、遺構は検出されなかった。

B地区は礎石建物跡、土壇、溝跡などが検出された。

礎石建物跡は建物の南東隅を検出し、礎石を4ヶ所、据付穴と根石が残されているもの6ヶ所を確認した。柱は1間毎ではなく半間毎に立ち、1間は1.96mで、これを6.3尺とすれば単位尺は0.311mとなり、6.5尺とすれば0.302mとなる。この他には建物のためと思われる整地層や、建物内の焼土層などが検出されている。共存する出土遺物はない。

土壇は4ヶ所で検出されたが、内2ヶ所は土師器と須恵器が共存している。

C地区は掘穴住居跡、埋設土器、焼土遺構、土壇、などが検出されている。

C8-1、2、3住居跡、いずれも住居の片側の一部しか検出していない。ほとんどの部分は未調査である。これらの住居は、わずかに位置をずらしながら3棟が重複している。外側からC8-1、C8-2、C8-3住居跡とした。

C8-1住居跡は山側に壁と周溝の一部を検出した。推定7.5m前後の住居と思われる。重複関係にある住居では最も新しい。

C8-2住居跡はC8-1住居からわずかに谷側にずれる。推定5m前後の住居と思われる。本住居はC8-1住居より古く、C8-3住居より新しい。

C8-3住居跡はC8-2住居からさらに谷側にずれる。推定7.5m前後の住居と思われる。重複関係のある住居中最も古いものである。埋土から門前式の深鉢土器が出土している。

C10住居跡、住居の中心部分を検出したことになり、両端の部分が未検出である。壁は山側のみ残り、谷側にはない。床は貼床で、径4mほどの範囲で確認された。床面上には地床灰

と思われる焼土面と柱穴2ヶ所、フレイタ・ビットが検出された。住居の大きさは推定で4.5m前後と思われる。時期は、C10-1土壌(晩期)とC10埋設土器(晩期)に切られているので晩期か後期と思われる。

土壌は約29高で、住居跡と重複、あるいは周辺に集中して検出された。いずれも小さく、プラスチック状のものは2基のみで、多くは一応ピーカー状で、底面の平坦なものは少ない。C10-1土壌は骨片が検出され、これを覆うように土器半個体分が被せてあった。

この他に、埋設土器3、焼土遺構2、などが検出されている。

C地区には遺物包含層があって多量の遺物が出土した。遺物を多量に包含する層はC8グリッドの半分ぐらいから始まり、C9、C10、C11グリッドと続く、調査区内では約17mぐらいの範囲で、遺構の集中地区とほぼ同じ範囲である。層厚は表土も含めて0.5~0.8mである。

包含層の下層は礫層であるが、C12グリッドからD1グリッドでは砂礫層の水平堆積層となり、C12グリッドの包含層末端では包含層を砂礫層が上・下にはさむように堆積している。この砂礫層は浜田川の氾濫による堆積層と思われる。

包含層からは、縄文時代中期、後期、晩期、弥生式の土器、土師器、須恵器、土偶、土甕、耳飾、円盤状土製品、羽口、石鏃、石匙、石剣、石棒、石斧、石皿、磨石、凹石、砥石、円盤状石製品、石錐、鉄滓、貝、馬の歯、猪の牙、などが出土している。大部分は縄文時代後期と晩期の遺物で占められている。

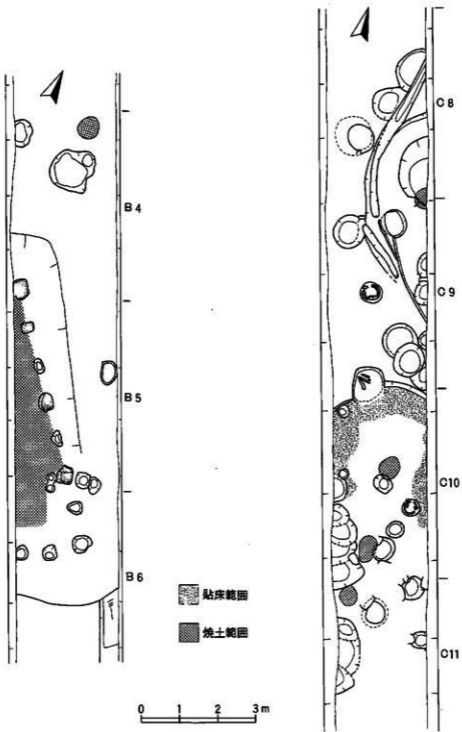
D地区は、わずかの遺物の出土を見たが、遺構は検出されなかった。

3 ま と め

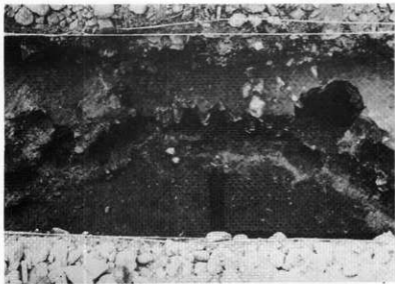
川内遺跡は、縄文時代中期から平安時代までの遺物が散在している。今回は限定された範囲での調査であったが、出土遺物の大部分は縄文時代後期から晩期のものであった。

調査した範囲では、比高の高い地区(B地区)には平安時代の遺構が検出され、比高の低い地区(C地区)には縄文時代後期と晩期の遺構と遺物が検出された。

遺跡は各時代の複合遺跡であることもあって、広い範囲におよぶものと思われるが、遺構や遺物の集中する範囲は、あるていど限定されるようである。全体に保存状況は良好と思われる。



川内遺跡遺構配置図



C 8 竪穴住居跡



C10-1土壇

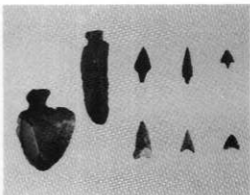


埋設土器

川内遺跡



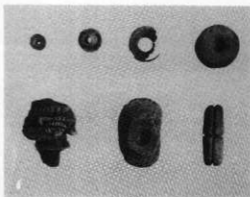
縄文土器



剥片石器



石斧・石棒



土製品

川内遺跡出土遺物

II 建設省係関

(1) 川口Ⅱ遺跡

遺跡所在地	岩手県岩手町大字子抱第11地割字岩崎205
委託者	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和58年5月12日～8月8日
調査対象面積	3,000㎡
発掘面積	3,000㎡
遺跡記号	KGⅡ83
調査担当者	専門調査員 高橋与右エ門・玉川英喜
協力機関	岩手町教育委員会



川口II・Ib遺跡位置図

1 遺跡の立地

本遺跡は、国鉄東北本線岩手川口駅の北々西約0.8kmに位置する。この地域は北上川上流域にあたり、遺跡はその北上川右岸の河岸段丘上に立地する。この段丘は、標高260m程の南北に延びる丘陵の東側にある緩やかな斜面であるが、段丘上には丘陵と並行する微高地が見られ、調査区域はその北端で段丘縁にある。段丘縁には段丘崖が見られる。これは北上川によって形成された他に近年の水田区画整理で一部削削を受けて急峻なものとなっている。遺跡の立地する段丘面の標高は約219mで、現在の河床との比高は約11mである。本遺跡の南々東1.8kmの地点には北上川左岸の河岸段丘に載る川口遺跡がある。

2 調査の概要

本調査は、国道4号川口バイパス建設に伴う緊急事前発掘調査で、調査対象はバイパス本線とその取り付け道路予定地の3,000㎡である。検出遺構は、縄文時代竪穴住居址5棟、土坑類22基、溝状遺構1基である。遺構の大半は調査区域北側の段丘崖沿いに集中している。以下に遺構と遺物の概略を示す。

<竪穴住居址>

検出された竪穴住居址5棟のうち、3棟(うち重複関係2棟)を上位面で、残る2棟を中位面(上位面より10cm下位)で検出した。これらの竪穴住居址は出土遺物からいずれも縄文時代後期中葉に属するものである。

上位面で検出された住居址は、平面形が楕円形、不整隅丸方形を呈し、規模は長軸又は方形の一辺が4～6mである。炉は1棟が石囲炉で、他は地床炉である。これらの住居址では多くの炭化物が検出されたことから、焼失家屋であると思われる。楕円形を示す住居址では支柱穴は明確でないが、壁際をほぼ全周する柱穴状小土坑が検出され、それが跡切れる南壁部分では径約40×20cmの土坑が約80cmの間隔で2基検出された。この部分は出入口施設である可能性が強く、今後に示唆するものが大きい。方形の住居址は、当初埋土土層から1棟と思われたが、石囲炉の下位から地床炉が検出されたことにより、2棟が重複する住居址であることが判明した。

中位面から検出された住居址は、平面形が楕円形及び隅丸方形を呈し、規模は長軸又は方形の一辺が3～3.6mと上位面で検出されたものよりやや小規模である。また、掘り込みも浅く、床面は上位面検出の住居址より10cm程高い。炉はどちらも地床炉である。

<土坑>

土坑類は全部で22基検出されたが、形状などからおおよそ次のように類別される。

A：所謂フラスコ形を呈するもので、さらに規模から2種類に分けられる。大型のものは開口部径が、1.5m前後、深さが1～1.2m位の大きさを持ち、小型のものは開口部径が50～80cm位、深さが50～70cm位である。

B：ビーカー形を呈するもので、規模は径1.5m、深さ60cm位のものから、径60cm、深さ10cm位のものまで様々である。埋土の状態から見て新しい時代のものが多いと思われる。

C：平面形が不整形円形状のもの。規模は長軸2mほど、深さ50～60cm位である。

これらの土坑類のうち、約半数から遺物が出土したが、いずれも縄文土器の破片である。また、特に大型のフラスコ形土坑では少なくとも2度にわたる土砂の流れ込みが観察された。

<溝状遺構>

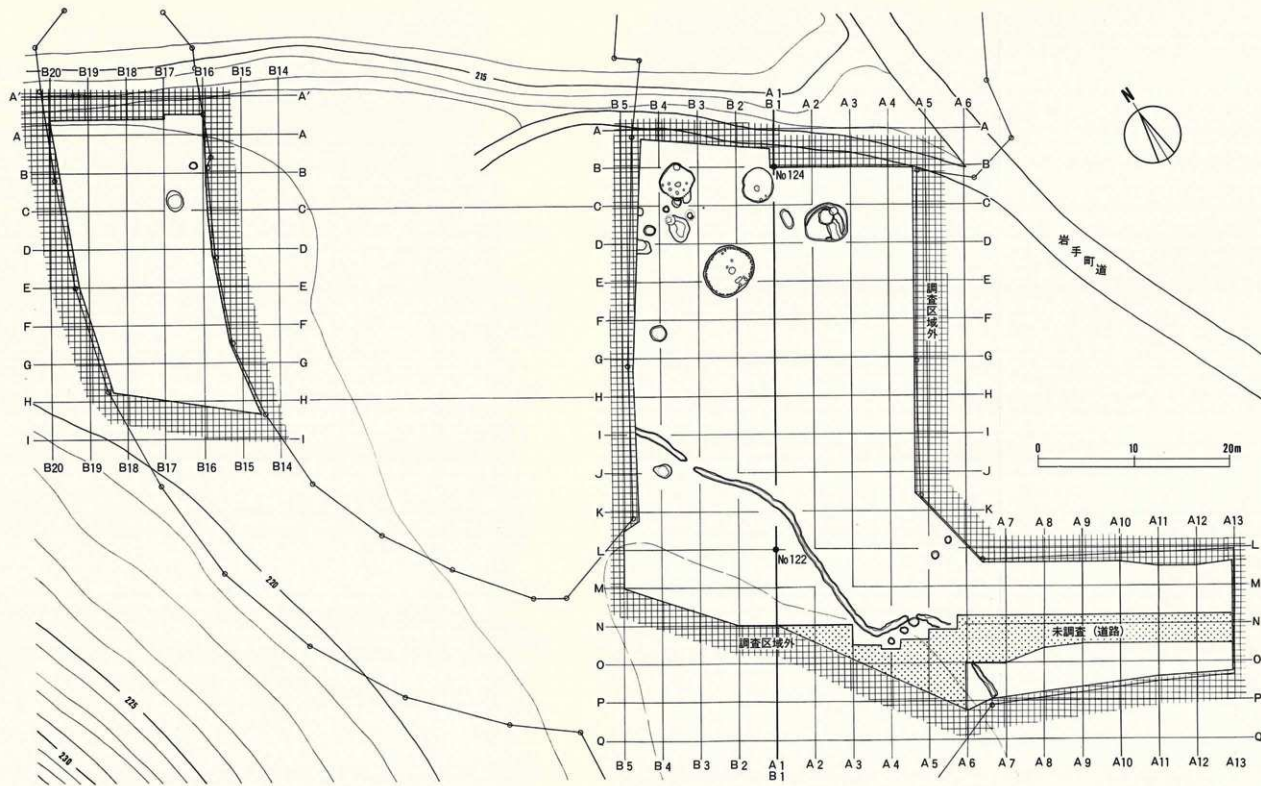
この遺構は調査区域中央西側から途中蛇行して斜めに調査区域を横切り、南端へと続いている。この溝は畑の境界とおもわれる細い通路にそっており、その部分が窪んで溝状になったものと思われる。規模は幅40～50cm、深さ10～15cm位である。埋土は表土と同じ土性である。

<出土遺物>

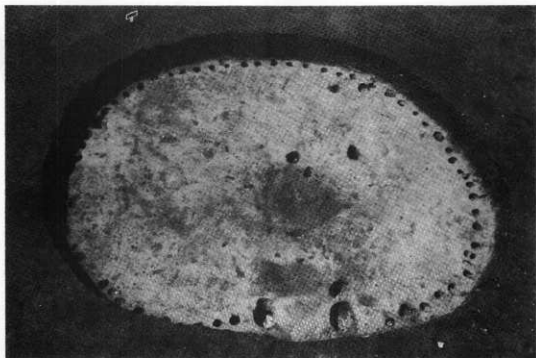
表土及び遺構検出面から多数の土器の破片が出土し、復元可能土器は十数個体である。時期はほとんどが縄文時代後期初めから中頃にかけてのものであるが、中に3片の早期の破片が含まれている。住居址埋土中からは完形、復元可能のもの十数点を含む多くの土器の破片が出土した。時期はいずれも後期中葉のものである。石器は比較的少なく、石鏃15点をはじめ、石錐、石匙、石斧、磨石等50点ほどである。その他に土偶の頭部1、炭化した堅果類、アスファルトが出土している。

3 ま と め

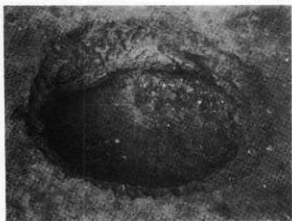
今回の調査で、川口Ⅱ遺跡は縄文時代後期中葉の集落跡と推定できる。遺構は先に述べたように調査区域北端に集中しており、地形等からさらに北西方向への広がりが予想される。また出入口に関連すると思われる施設を持つ住居址の確認や、アスファルトの出土によって、当時の住居址の構造及び交易等を考える上での良好な資料となるであろう。



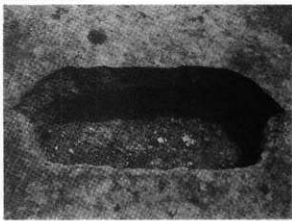
川口Ⅱ遺跡遺構配置図



BD 2 住居址と遺物出土状況



BC 4 土坑 1



AC 1 土坑

川口Ⅱ遺跡



1 ~ 3 BD2住居址出土
4 ~ 6 BB1住居址出土



川口Ⅱ遺跡出土遺物

(2) 川口 Ib 遺跡

遺跡所在地	岩手郡岩手町大字川口第12地割字ニツ森48の3
委託者	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和58年10月17日～11月17日
調査対象面積	1,630㎡
発掘面積	1,630㎡
遺跡記号	KG I b 83
調査担当者	主任専門調査員 近藤 宗光 専門調査員 酒井 宗幸
協力機関	岩手町教育委員会

1 遺跡の立地

この遺跡は、国鉄東北本線岩手川口駅の南約1kmにあり、国道4号の西側に接している。この付近は北上川上流地域にあたり、西側段丘下は北上川による谷底平野になっている。遺跡は北上山地から発する沢により形成された扇状地の扇端部分に載る。この扇端部分は北上川に侵蝕され下位段丘になっている。標高は約210mである。

2 調査の概要

調査は国道4号川口バイパス建設に伴う緊急事前調査であり、調査年度の関係を57年度調査区をⅠa、本年度調査区をⅠbとした。Ⅰbにおいて検出された遺構は陥し穴状遺構17基で、他の遺構はない。形状などから次の4つのタイプに類別して述べる。

<Aタイプ>

形状は細長く溝状のもので、底面にはいくつかの杭状の副穴があるタイプで、7基ある。開口部での長さ280～410cm、幅100～130cm、底面での長さ100～130cm、幅30cm前後のものである。深さは85～130cmである。底面の副穴は径3～5cm、深さ10～20cmのものが多く、深いものは30cmほどである。陥し穴状遺構1基につき7～13個ほど持ち、配列には規則性はない。

このタイプは昨年調査のⅠaでも2基発見されており、本年度調査分と連続するものと思われ、南北方向に並ぶ。また本年度調査分では東西方向に並ぶものもある。

<Bタイプ>

形状は隅丸長方形を示すもので、開口部での規模は270×170cm、底面では205×85cmである。深さは80cmで、1基のみの検出である。底面には杭状の副穴がある。径3～6cmで深さは10～20cmであり、17個ある。

<Cタイプ>

平面形はほぼ円形のもので7基あり、開口部規模は径120～130cm、底面は径60cm前後の円形である。深さは120～140cmあり、全体として円筒形である。底面には1～2個の杭状の副穴があり、径5～9cm、深さは10～25cmである。このタイプは東西方向に並んでいる。Ⅰaでピットとした2基はこのタイプと思われる。

<Dタイプ>

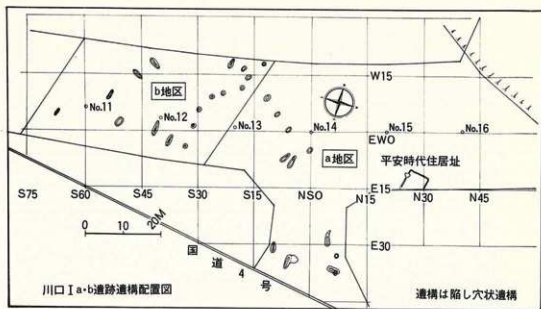
平面形は楕円形を示し、開口部規模は長軸180cm前後、短軸95～120cm、底面は長軸130cm、短軸150cmの楕円形を呈し、深さは80cm前後である。2基検出され、Ⅰaで4基並んで検出されたものの連続である。

<出土遺物>

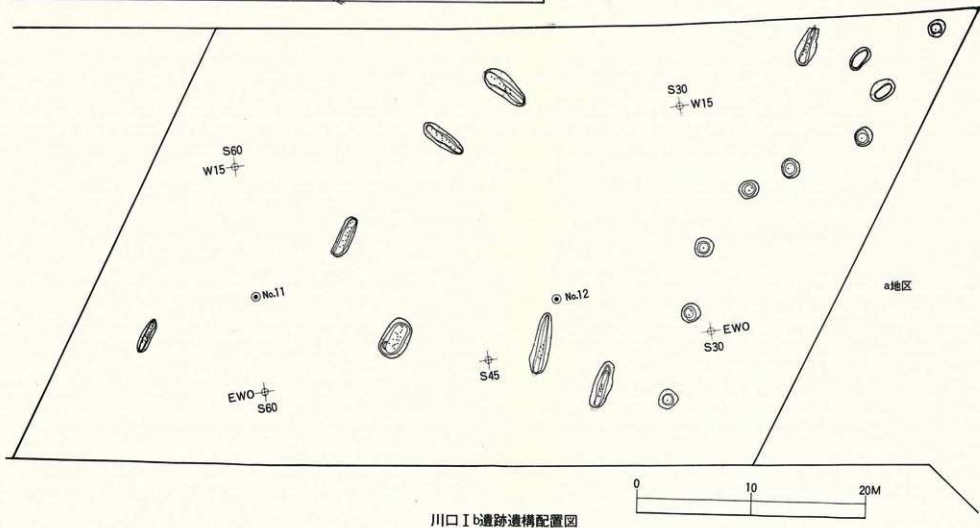
掘削の際、縄文土器片、土師器片が表土下50cmほどの範囲で若干出土したが、陥し穴状遺構を検出したのはそれより更に50～70cm下位で、その付近では出土遺物はなかった。

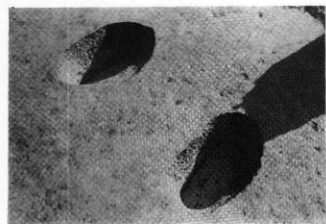
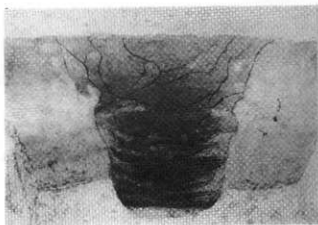
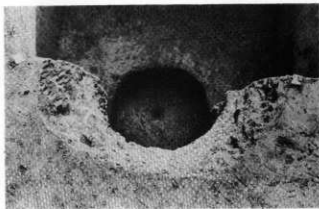
3 ま と め

川口Ⅰ遺跡は2年に分けて調査した。その結果Ⅰa地区から検出された平安時代竪穴住居址以外は、陥し穴状遺構中心の遺跡であることが判明した。この遺構はほぼ同時期のものと思われるが、形状や底面の陥穴の有無などによって5つぐらいのタイプに分けられ、それぞれ規則性のある配列を示す特色を持っている。

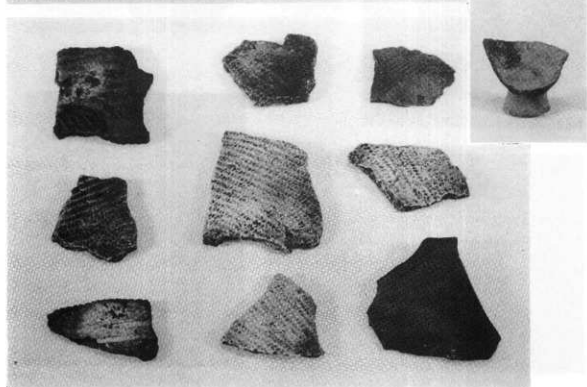
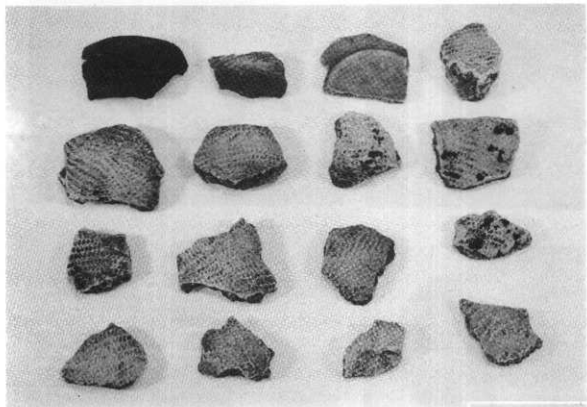


調査区域外





川口b遺跡



川口 I b 遺跡出土遺物

(3) 小屋燬遺跡

遺跡所在地	久慈市長内第19地割～第20地割内
委託者	建設省三陸国道工事事務所
調査期間	昭和58年8月4日～11月8日
調査対象面積	2,900㎡
発掘面積	2,900㎡
遺跡記号	KH83
調査担当者	専門調査員 田鍋寿夫・柳沢潤郎
協力機関	久慈市教育委員会



小屋畑遺跡位置図

1 遺跡の立地

本遺跡は久慈市役所の南約2.5kmに位置し、西側には国鉄久慈線及び国道45号がほぼ南北に走る。東方約2kmには久慈湾があるが、この海岸周辺には海岸段丘が広く発達しており、夏井川・久慈川・長内川はこれらの海岸段丘を開析しつつ河口付近で合流し湾に注ぐ。

遺跡は長内川の支流である小屋畑川の流域にあり、標高約35m～38mの東から舌状に張り出す段丘面に載っている。

周辺には昨年度調査が行なわれた上野山遺跡の他に、平沢遺跡・二子貝塚・館石遺跡・三崎遺跡・上新山遺跡・寺里遺跡・妻生遺跡など多くの遺跡がある。

2 調査の概要

本調査は、国道45号線久慈バイパス建設に伴う緊急発掘調査である。調査区域内には、東から西に舌状に張り出す緩斜面が北側及び南側に各1面ずつあり、遺構のほとんどはこの面で検出されている。北側及び西側の斜面下方はあらかじめ粗掘りを行ない、遺構の有無を確認した後土捨て場にあてた。

調査の結果、竪穴住居址11棟・住居址状遺構2棟・ピット20基・陥し穴状遺構6基・焼土遺構2基が検出された。

<竪穴住居址>

竪穴住居址11棟は、いずれも古代に位置づけられるもので、北側の緩斜面で4棟、南側の緩斜面で7棟検出されている。

平面形はいずれの住居址もほぼ方形を呈し、規模は最大のもので一辺約8m×7m、その他は一辺5m前後のもの2棟、一辺4m前後のもの1棟、一辺3m前後のもの7棟である。カマドの位置は、北壁に構築されているもの6棟、東壁に構築されているもの4棟、東壁と北壁に2基のカマドをもつもの1棟、南東隅にカマドをもつもの1棟である。大部分のカマドの煙道が割貫き式であり、芯材に偏平な砂岩及び凝灰岩を使用している例が多い。最大規模をもつAⅡ-1住居址のカマドは残存状態がきわめて良く、袖部から煙出し部までの全長約230cm、袖部幅約65cm、煙道部幅約30cm～70cmの規模をもつものである。袖部は芯材として左右共偏平な砂岩を床面下約10cmに埋藏し、粘土を貼り付けて固定している。煙道部から煙出し部にかけて板状砂岩を上が開く形に埋め込み、さらに上を板状岩で覆っているもので、入念に構築されている。

検出されたほとんどの住居址の埋土下位及び床面から炭化物・炭化材及び現地性焼土が検出され、焼失住居址であることが確認された。出土遺物はロクロ未使用土師器の甕・坏、ロクロ使用の坏の他に、須恵器・羽口・刀子・土製及び鉄製の紡錘車等である。

<住居址状遺構>

住居址状遺構2棟は北側緩斜面に1棟、南側緩斜面に1棟検出された。遺構内から炉址及び

柱穴が検出されなかったことから住居址状遺構と認定したものである。規模は1棟が最大径約2.8m、壁高約31cm、あとの1棟は最大径約3.8m、壁高約23cmの平面形がいずれも楕円状を呈するものである。出土遺物は得られていない。

<ピット>

ピット20基は北側の緩斜面に18基、中央部斜面に1基、南側緩斜面に1基検出されている。断面形で大別すると、フラスコ形を呈するもの9基、ビーカー形を呈するもの10基、浅鉢形を呈するもの1基である。規模は開口部が径約90cm～200cmのもので、大半のピットは径約140cm前後のものである。出土遺物はBⅡ-60ピット埋土から一括した縄文時代後期初頭に位置づけられる土器が得られているが、その他のピットからは得られていない。

<陥し穴状遺構>

陥し穴状遺構6基は、北側緩斜面に4基、南側緩斜面に2基検出されている。短軸断面で大別するとロート状を呈するもの1基、U字状を呈するもの5基である。規模はロート状を呈するものは長軸約320cm、短軸約30cmである。又、U字状を呈するものは長軸約180cm～320cm、短軸約70cm～110cmである。遺物は得られていない。

<焼土遺構>

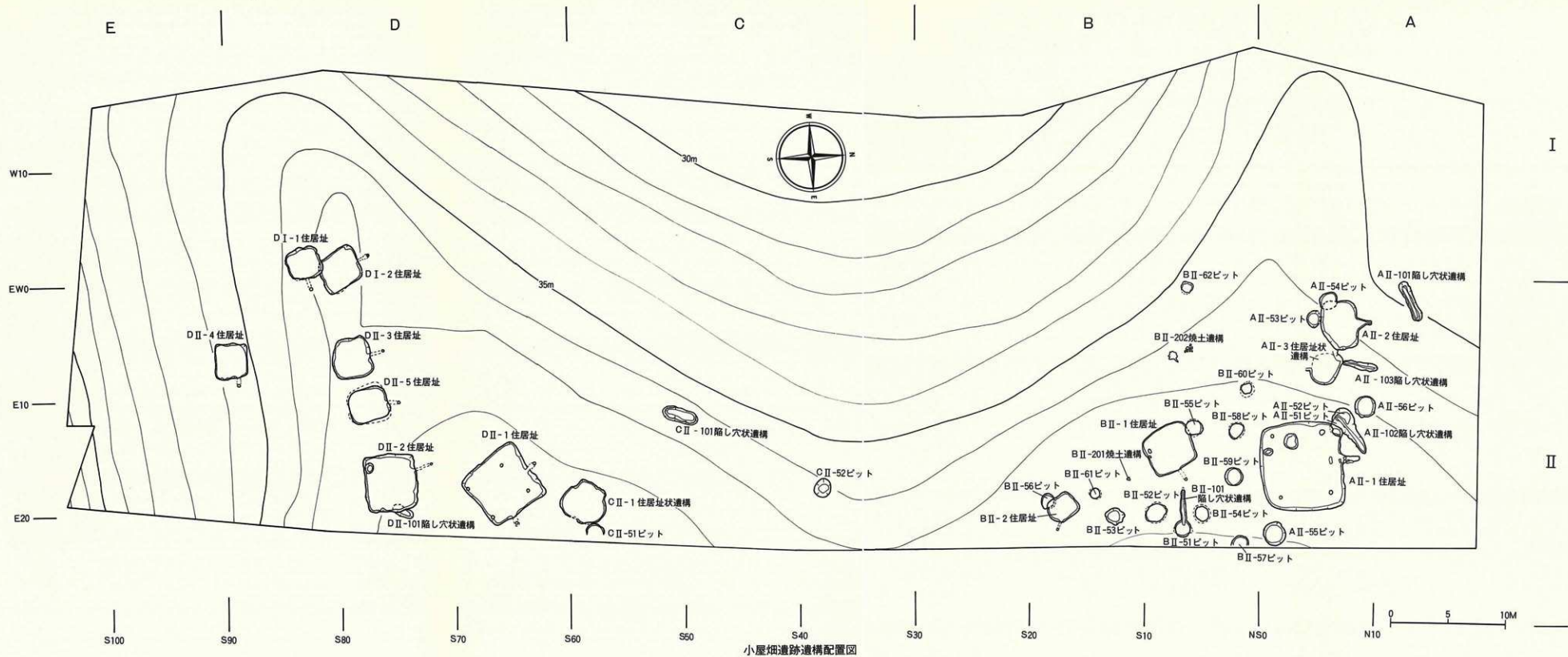
焼土遺構2基はいずれも北側緩斜面に検出されたものである。規模は径約80cm×100cm、焼土厚約10cm、及び径約25cm・焼土厚約4cmである。時期については、検出面が古代住居址より下がるので、古代住居址より古いものと思われる。

<遺構外出土遺物>

遺構外から得られた遺物は、縄文時代前期・後期・晩期に位置づけられる土器片、土師器、石鏃・石匙・スクレーパー・石斧・フレーク等である。これらのうち土器は縄文時代後期に位置づけられるものが、石器類では石匙が比較的多く出土している。

3 ま と め

今回の調査の結果、以上のとおりの遺構及び遺物が得られた。検出された住居址11棟は奈良及び平安時代の住居址であり、当地にこの時代の集落が形成されたことが確認された。今回の調査は集落の一角を調査したに過ぎない。調査区東側には広範囲の緩斜面があり、そこには縄文土器・土師器及び石器類が分布しているところから、縄文時代・奈良及び平安時代の遺構が存在するものと思われる。この広範囲な緩斜面を調査することによって、この遺跡の全容並びに性格がより明らかになるものと思われる。



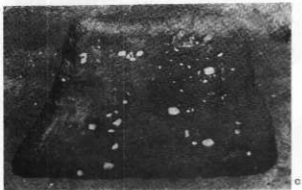
小屋畑遺跡遺構配置図



a



b



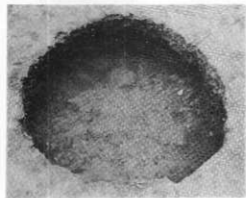
c



- a. AⅡ-1 住居址
- b. AⅡ-1 住居址カマド
- c. DⅡ-1 住居址
- d. DⅡ-2 住居址
- e. BⅡ-101 陥し穴状遺構
- f. BⅡ-61 ピット
- g. BⅡ-51 ピット



d



f



g

小屋畑遺跡



a. AⅡ-1 住居址床面出土



b. AⅡ-1 住居址床面出土



c. AⅡ-1 住居址カマド出土



d. BⅡ-60ピット埋土出土



e. DⅡ-2 住居址カマド出土



f. DⅡ-2 住居址カマド出土



g. AⅡ-1 住居址床面出土



h. AⅡ区粗掘り出土



i. DⅡ-5 住居址埋土出土



j. DⅡ-5 住居址
カマド出土



k. AⅠ区粗掘り出土

小屋畑遺跡出土遺物

Ⅲ 日本道路公団関係

(1) 馬場野Ⅰ遺跡

遺跡所在地	九戸郡軽米町大字軽米第12地割字馬場野115—2他
委託者	日本道路公園仙台建設局
調査期間	昭和58年4月11日～10月31日
調査対象面積	10,000㎡
発掘面積	10,000㎡
遺跡記号	B NⅠ83
調査担当者	専門調査員 工藤利率・田村壮一・中川重紀
協力機関	軽米町教育委員会



馬場野II遺跡位置図

1 遺跡の立地・環境

馬場野Ⅱ遺跡は、北上山地の北東縁に発達した丘陵地帯に形成されており、軽米町役場の北西約1kmの所に位置している。遺跡は、九戸村・軽米町内を北流する雪谷川および瀬月内川とに挟まれた低位な丘陵部と谷部の平坦地とに広がっている。調査対象区域は、大きく区分すると北東区域の尾根部・斜面部、沢沿い東よりの平坦部、そして西よりの緩斜面部とから構成されている。しかし、各区域は数ヶ所の沢状雨裂によって細分されている。これら調査対象区域の標高は、195～215mの範囲にあり、周辺には緩やかな丘陵と小規模な谷地形とが数多く発達している。

周辺の八戸線関連遺跡としては、当遺跡の北東側尾根部に馬場野Ⅰ遺跡が、更に北側の谷部と尾根部には灰屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡が存在し、馬場野Ⅰ遺跡をのせる尾根の東端縁およびその北側には灰屋敷Ⅰa・Ⅰb遺跡が存在する。また当遺跡の南側約1kmほどの地域には君成田遺跡群が広がっている。

遺跡および周辺地域の表層地質は、十和田a・b降下火山灰層、中殿浮石層、南部浮石層（通称“ごろた”）、八戸火山灰層群などの厚い火山砕屑物層で構成されている。また調査対象区域の地目現況は、赤松・カラ松・杉などの林地として利用されており一部が水田および畑地として利用されている。

2 調査の概要

本遺跡の発掘調査は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に先だつ緊急発掘調査である。発掘調査は、昭和56年7月～11月までの雑物撤去・粗掘・遺構検出作業に始まり、翌57年4月～11月までは北東区域の尾根部とその南に広がる斜面・平坦地を中心に調査を進めている。

今年度は、4月11日から10月31日まで沢沿いの平坦地および西側の緩斜面区域を中心に調査を行なった。その結果、中殿浮石混土層の上面で縄文時代後期～晩期の住居址20棟と弥生時代住居址2棟、陥し穴状遺構4基、フラスコ形土坑や直円筒形土坑など105基、その他を検出・精査した。さらに南部浮石層の下位層からは住居址状堅穴遺構2棟、浅い土坑2基などと共に押型文・斜行縄文・多軸絡条体回転文などの土器片と数種の石器類を検出した。

三年間に亘る調査成果は、縄文時代早期の住居址状堅穴遺構2棟、同土坑2基、焼土遺構2基、縄文時代中期末～晩期の住居址および住居址状堅穴遺構63棟、弥生時代住居址11棟、陥し穴状遺構・フラスコ形土坑・直円筒形土坑など209基、土器埋設遺構3基、焼土遺構9基などである。また中世以降の牧槽・囲欄跡と考えられる柱穴列群が検出されている。その他、関連する遺構は発見されなかったが縄文時代前期～中期中葉などの土器も出土している。

以下に遺構および遺物の概略を説明する。

〈遺構分布の概要〉

遺跡の調査対象区域は、大きく分けると北東の尾根部とその南斜面、沢沿いの中央付近から

東よりの平坦部、沢沿い中央付近から西よりの緩斜面部そして最も西はずれの斜面部の5区域から構成されており、各区域によって時代・時期を異にする遺構群が形成されている。

尾根部では尾根筋に沿って縄文時代中期末～後期初頭の住居址9棟と同晩期の住居址2棟、晩期の住居址状竪穴遺構2棟が検出されている。そしてこれらの住居址等と重複・切り合いの形で大小のフラスコ形土坑・直円筒形土坑などの土坑が60基あまり分布している。

尾根からやや下った南斜面には、縄文時代中期末から同後期初頭の住居址1棟と同晩期の住居址1棟、時期不明の住居址1棟、住居址状竪穴遺構2棟、そして10数基の土坑が散在的に分布している。

さらに下った沢沿いの中央付近から東よりの平坦部には、東北地方における弥生時代初期の住居址9棟、同弥生時代の土坑7基、縄文時代後期の住居址7棟、フラスコ形土坑・陥し穴状遺構など25基あまりが分布している。さらにこの区域の南部浮石層の下位からは、縄文時代早期の土坑2基、住居址状竪穴遺構2棟、そして数群に区分される3,000余点の土器片・石器等の遺物群の分布を検出している。

沢沿いの中央から西より緩斜面区域には弥生時代の住居址2棟、縄文時代後期中葉～同晩期の住居址35棟、竪穴遺構2棟、そして60余基のフラスコ形土坑・直円筒形土坑などが群をなして分布している。これらの遺構群は、沢状の兩裂部（“廃棄の場”的な遺物包含層となっている）を避けるように構築されており、住居址の中には1～2度の建替あるいは増改築を行なったものも見られる。また、この区域の住居址のほとんどから住居の“出入口”を明示する施設を確認している。

最も西はずれの斜面部では、縄文時代後期の住居址1棟、陥し穴状遺構1基、フラスコ形土坑等20余基が群をなしている。この区域の土坑は小型で不整形なものが多い。

＜竪穴住居址および住居址状竪穴遺構＞

本遺跡で検出された住居址は、すべて竪穴式のものであり、平地式あるいは平地式に類似したものは認められない。住居址に類似する遺構で柱穴・炉跡等を確認できなかった住居址状竪穴遺構としては、早期2棟、縄文中期末～後期のもの4棟、縄文時代ではあるが時期不明2棟の計8棟が検出されている。なお各住居址の時期については詳細な分析が進んでいないため以下の説明内容は極く大まかな内容となる。

- 1) 早期のものは長軸長440cm・短軸長320cm・深さ約30cmの平面形が長楕円形を呈するものと、長軸長280cm・短軸長255cm・深さ約55cmで平面形がやや楕円形を呈するものである（平面規模は何れも上端数値）。両遺構とも床面から押型文土器が出土している。柱穴・炉跡は確認されていない。
- 2) 中期末～後期初頭の住居址は、すべて昨年度調査によるもので今年度の調査では確認されていない。これらの住居址は、尾根部とその南斜面に分布しており、多くの土坑と重複、切

り合いの関係にあるところから更に数期に区分されるものと考えられる。平面形・規模は、直径400cm前後の円形～やや楕円形となるものがほとんどで、炉は“複式炉”の構造をもつ石組炉が南～南東壁に接する形で設けられている。柱穴配置は、炉および住居の中心軸をさむように4～6本の柱穴が左右対称に配置されている。西区域の後期中業から末業の住居址に見られる壁際の小柱穴列や周溝はほとんど見られず、また“出入口”を示す施設も明確ではない。

- 3) 後期中業～末業の住居址は、主に調査対象区域中央付近から西よりにかけての平坦地、緩斜面に分布している。これらの住居址では、切り合い・重複するものや増改築を行なったものが多数認められる。住居の検出状況・伴出土器などから3～4時期に区分される。平面形・規模は、長軸長400cm前後の楕円形で住居の中心付近に炉をもち、4～6本の柱穴が台形あるいは長方形を構成する配置のものが最も多く見られる。次いで長軸長500～600cmのものが多いが、600cmをこえ800cm前後の長軸長をもつものが6棟も存在する。またこれらの住居址は、住居の南～南東の壁付近に“出入口”と判断できる施設構造をもっており、この構造の相違によっても3～4種類に区分できる。
- 4) 晩期の住居址は、他の時期に比較して、まとまりのない散在的分布を示しており、平面形・規模はほぼ円形で径300～400cmとなっている。炉は住居の中心に円形の石囲炉が設けられている。柱配置・出入口部等は不明である。
- 5) 弥生時代の住居址は、中央付近の平坦地を中心に11棟を検出している。平面形・規模は、円形(径650～800cm)・楕円形(長軸長700cm、短軸長650cm前後)・円形に近い胴張隅円方形(軸長650cm前後)の3種類が見られ、何れの住居址でも中心付近に円～楕円形の石囲炉をもっている。柱穴配置は4本を基本としているが、増改築がなされたものでは柱間を広げて4本としたものと、増築部方向に柱数を増して6本としたものが見られる。なお弥生時代住居址のすべてに十和田b降下火山灰層が埋土の一つとして堆積しており、この中の1棟では十和田a降下火山灰層の堆積(20～25cm厚)も認められた。

<陥し穴状遺構・土坑・その他>

- 1) 陥し穴状遺構4基のうち、3基は調査対象区域の中央付近から、他の1基は西はずれの土坑群と共に検出している。規模は、長軸長300～400cm、深さ150cm前後となっている。
- 2) 土坑としては、フラスコ形土坑・直円筒形土坑・皿状の浅い土坑・小判形の墓坑様のものなど計205基を検出している。フラスコ形土坑は、比較的大型のものが尾根部に集中しており、西はずれの土坑群は小型のものが多い。また他の区域に分布する土坑は、多くが小型の直円筒形土坑でありフラスコ形土坑は少ない。これらの土坑は、尾根部をのぞけば20～30基前後が一群をなすように分布している。これらの土坑は、ほとんどが縄文時代のものであり弥生時代と考えられるものは10数基である。

- 3) その他の遺構としては、焼土遺構(9基)・土器埋設遺構(3基)などが存在するが土器埋設遺構としたものの中には埋設坑が不明瞭なものも見られる。
- 4) 自然凹地への器物投棄(廃棄の場)・各種の自然現象が認められたが、中でも地震等による地割れ(堆積層の水平移動…地すべり現象)あるいは雨後における地下水の噴出現象は他の地域ではあまり観察できない現象である。

<遺物について>

縄文時代・弥生時代の土器・土製品・石器・石製品・堅果類などが出土している。土器では縄文時代早期の貝ガラ文土器・押型文土器・縄文土器・多軸絡条体回転文土器などが南部浮石層の上下層から出土しており、数ヶ所の遺物包含層からは前期～中期中葉の土器なども出土している。しかし、中心となる遺物は縄文時代後期および弥生時代初期のものである。石器石製品としては、石鏃・石匙・石錐・楔形石器・掻器類・磨製石斧・石皿・磨石・くぼみ石類などが出土しているものの、石棒・石刀・石剣と断定できるものは出土していない。

堅果類としては、クリ・クルミ・ナラ類の炭化したものが少量出土している。これらは、焼失住居、焼土遺構・炉などから出土したものであり、貯蔵の形では発見されていない。

3 ま と め

三年間に亘る調査によって縄文時代早期・中期末～晩期、そして東北地方における弥生時代初期の住居址・土坑類を多数検出した。調査対象区域が遺跡全体とは言えないものの各時代・時期の住居配設、住居構造あるいは占地形態など集落址研究を進める上で貴重な資料を得ることができた。縄文時代後期の住居址では占地的変遷はもとより出入口施設等の構造にも特徴的なものがあり、土器型式と相まって数時期に区分できそうである。また弥生時代初期の集落址については調査例も少ないところから住居址構造や集落構成の解明はもとより、生業形態の解明に大きな手がかりとなろう。

なお、本遺跡に見られる遺跡遺構の在り方は、単に一遺跡内に止どまるものではなく周辺に分布する馬場野Ⅰ遺跡・吠屋敷Ⅰ～Ⅲ遺跡・碧成田遺跡などはもちろんの事、雪谷川・瀬月内川流域を中心とした北部北上山地における遺跡相互の在り方と大きく係わるものである。

馬場野Ⅱ遺跡遺構配置図

(図例)

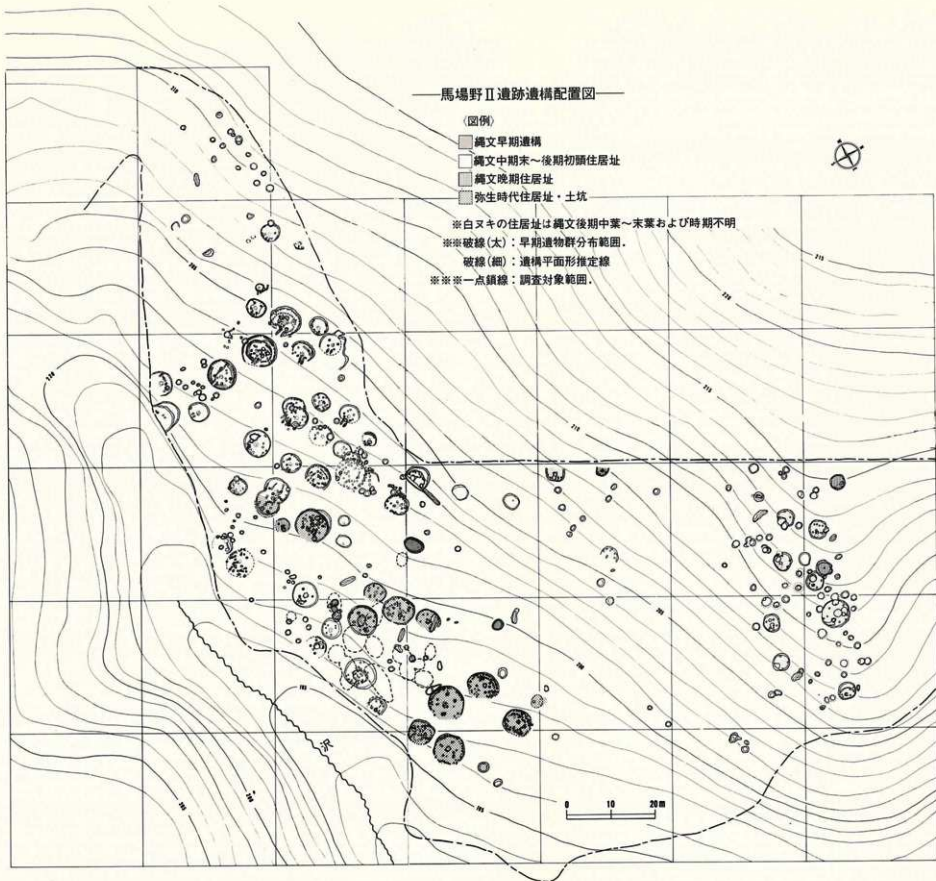
- 縄文早期遺構
- 縄文中期末～後期初願住居址
- 縄文晩期住居址
- 弥生時代住居址・土坑

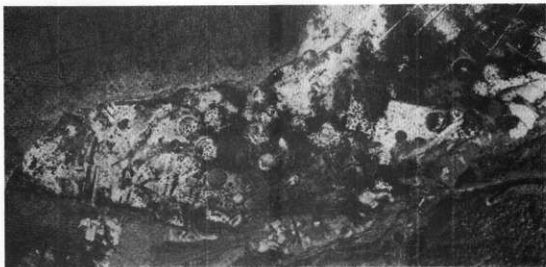
※ 白ヌキの住居址は縄文後期中葉～末葉および時期不明

※ ※ 破線(太)：早期遺物群分布範囲。

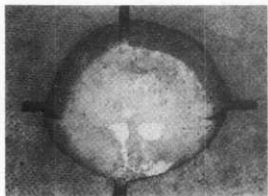
破線(細)：遺構平面形推定線

※ ※ ※ 一点鎖線：調査対象範囲。

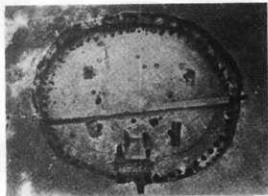




遺構分布状況 (1983年8月撮影)



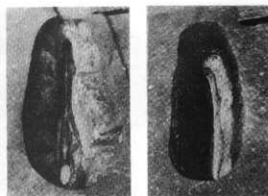
住居址状竪穴遺構 (早期)



竪穴式住居址 (後期)

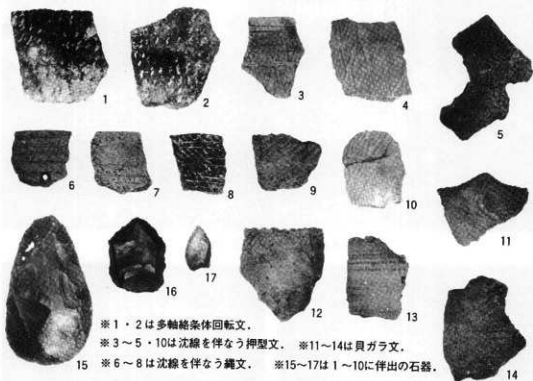


遺物出土状況 (早期)



陥し穴状遺構 2 基

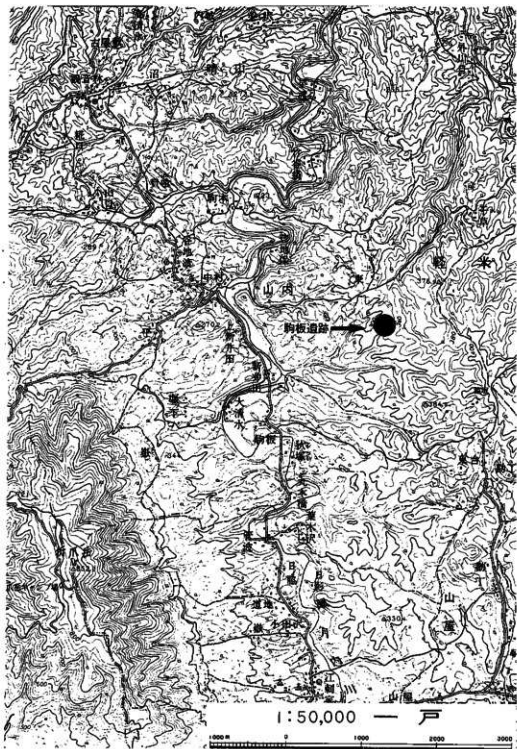
馬場野Ⅱ遺跡



馬場野Ⅱ遺跡出土遺物 (縮尺率不同)

(2) 駒板遺跡

遺跡所在地	九戸郡軽米町大字山内第4地割字駒板111の1
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年4月11日～10月11日
調査対象面積	27,700㎡
発掘面積	27,700㎡
遺跡記号	KOM83
調査担当者	主任専門調査員 近藤宗光 専門調査員 鈴木恵治・渡辺洋一・大原一則 岩淵久・光井文行・酒井宗孝
協力機関	軽米町教育委員会



鉤板遺跡位置図

1 遺跡の立地

駒板遺跡は、北上山地の北端の山中、北緯 40°17'34" 東経141°25'35"の地点にあり、軽米町役場の南西 4.5 km に位置する。ほぼ平行して北流する雪谷川と瀬月内川に挟まれて南北に延びる丘陵（標高200～400m）の西斜面にあり、南西 5 km に折爪岳（852 m）を望む。瀬月内川に注ぐ沢を 1.5 km 程遡った山林中の尾根と沢沿いに遺跡が広がっている。瀬月内川との比高は約100m、標高は300m前後である。約30年前には馬の放牧地であったところで、東北縦貫自動車道八戸線の折爪サービスエリア建設予定地である。広さは東西約250m南北約450mに及び、3つの谷（北、東、西）と4つの尾根（北、東、西、中央）に大別できる。

2 調査の概要

この遺跡はサービスエリア地内における山林伐採後新たに確認されたものである。昭和57年に発掘調査を開始し昭和58年に終了した。昭和57年には78,700㎡にわたる遺跡全面の粗掘を行ない、東半分を主として51,000㎡の精査をした。本年度は西半分で残りの27,700㎡の精査を行ったものである。

昨年度の発見遺構数は、縄文後晩期壑穴住居址36棟、奈良時代住居址3棟、縄文時代ピット121基、陥し穴状遺構10基、炉址・焼土遺構7基、近世炭窯8枚、幕末期密鉄鋳造場跡1カ所であった。本年度の調査では、縄文後晩期壑穴住居址29棟、奈良時代住居址12棟、中世住居址2棟、縄文時代ピット149基、陥し穴状遺構7基、炉址・焼土遺構9基、埋設土器2基、近世炭窯20枚の発見である。2年にわたる遺構の合計は、縄文後晩期壑穴住居址65棟、奈良時代住居址15棟、縄文時代ピット270基、陥し穴状遺構17基、炉址・焼土遺構16基、近世炭窯28枚である。

遺構は北尾根とその南側斜面、西尾根南東斜面とその連続の西谷右岸、中央尾根稜線部とその南斜面・西斜面下緩斜面に発見された。以下その地区毎に述べる。

<北尾根>

この尾根は遺跡の北端にあたり、小さな起伏を示しながら東から西に延びて西尾根に連なる。尾根の北側斜面は東寄りでは緩やかであるが、西寄り急傾斜となる。南側斜面は緩やかに下がり、この先は西谷に続く。

検出された遺構は、縄文後晩期壑穴住居址8棟、奈良時代住居址6棟、ピット68基、陥し穴状遺構7基などである。縄文時代の住居址は稜部とそれが北側に下がりはじめた部分に占地するものが多く、南向きの斜面に検出されたのは本年度唯一の住居址1棟だけである。これに対しピットの大部分は南側斜面に検出された。住居址は沢沿いに吹き込む風を避けて構築している。奈良時代の住居址はすべて本年度調査のもので、南側斜面の下位に占地している。6棟のうち4棟はカマドを持ち、一辺3.5～4.5mほどの隅丸方形のものである。カマドは北西壁中央にあり、煙道はくり抜き式である。これらの住居址は殆んど焼失である。カマドを持たない住

居址は一辺2.5～3.5mの隅丸方形で、1棟には地床炉がある。最小の住居址を除き全ての住居址が貼床されている。ピットと陥し穴状遺構は尾根稜線部から南斜面一帯にかけてある。本年度調査のピットは28基、陥し穴状遺構は2基である。ピットはフラスコ形のものが多い。2基のピットを底面に持つピットを40cmほど埋め戻し、改めて底面に2基のピットをつくったピットがあった。このピットの埋土からは完形土器が出土している。陥し穴状遺構は溝状のものが多く、等高線に平行につくられている。1基だけは円筒形のもので底面に杭状の副穴があった。

〈西尾根〉

この尾根はサービスエリアの緑地帯が含まれており、調査区域は西側斜面から南東斜面にかけてである。遺構は西側斜面にはなく、南東斜面に集中している。この尾根の南東斜面は昨年度調査の西谷右岸につながる。

この地区は本年度のみの調査で、検出された遺構は縄文後期堅穴住居址4棟、奈良時代住居址6棟、ピット23基、陥し穴状遺構1基などである。縄文時代住居址は南東斜面下位にあり、急傾斜地である。そのため住居址の南東側は削削されているが、径2.5～3.5mの規模の円形を呈すると思われる。出土遺物は極めて少ない。奈良時代住居址は尾根が舌状に張り出した先端部分の緩斜面にあり、6棟のうち、カマドを持つものが4棟で、そのうち2棟は重複している。他はカマドのないものと大部分が調査区域外にあるためカマドの有無が不明のものである。重複している住居址は一辺4.5mほどの方形の住居址が6.5×6.0mに拡張されたものである。他のカマドを持つ住居址は一辺4mの方形と4.5×5.5mの長方形のものである。これらの住居址のカマドはいずれも北西壁中央にあり、煙道はくり抜き式である。床面は貼床である。また全ての住居址が焼失であり、特に大型の2棟の住居址では炭化材の残存状態がよく、上屋構造がある程度推定し得るものと思われる。上述の北尾根の住居址や昨年調査の西谷右岸の住居址も殆んどが焼失であり、大規模な火災があったと考えられる。ピットはフラスコ形のものが多い。底面から深鉢土器が出土したものがある。

〈西谷右岸〉

この地区は昨年の調査で、縄文後期堅穴住居址4棟、奈良時代住居址3棟、ピット11基、焼土遺構2基などを検出している。

〈中央尾根〉

この尾根は東から西にのび、屈曲して南へ舌状に延びる。屈曲する部分の標高はこの地区で最も高く約316mである。この稜線部を中心に検出された遺構は縄文後期堅穴住居址4棟、ピット111基、陥し穴状遺構6基、焼土遺構2基等である。縄文時代住居址のうち1棟は昨年調査したもので尾根の東側にある晩期のものである。本年度調査の3棟は尾根が南斜面となる頂部の端にあり、縄文後期のものと思われるが、遺物は細片であり、更に地形上、表土が薄い

こともあって不明の部分が多い。ピットは尾根後線部を中心に発見されたが、尾根が西から南に屈曲する地点や尾根南端部などに特に集中している。本年度調査のピットは42基でフラスコ形のものが多い。ピットのなかには、開口部が径80～100cmで円または楕円形を示し、深さが125～145cmの円筒形のものがあり、貯蔵穴と思われるものもあった。

<中央尾根西側緩斜面>

中央尾根の西側は一旦急傾斜で下がったあと緩斜面を形成し、それが南流する西谷によって浸蝕されている。この緩斜面は本年度のみの調査で、中世住居址2棟、ピット2基、焼土遺構2基を発見した。中世住居址のうち1棟は南東方向に出入口施設と思われる張り出しを持ったもので、本体の規模は一辺3mの方形で、貼床されている。出土遺物はない。

<中央尾根南斜面>

中央尾根から標高を下げつつ南西にのびる鞍部と西流する沢に下がる斜面部分である。遺構は鞍部に集中する他、斜面中位の傾斜が幾分緩やかになっている部分と斜面下位の西側に発見されている。検出された遺構は縄文後晩期竪穴住居址45棟、ピット55基、陥し穴状遺構3基、屋外炉・焼土遺構6基、埋設土器3基等である。

縄文時代竪穴住居址は昨年調査分24棟、本年度分21棟である。このうち縄文後期と思われるものは19棟、縄文晩期と思われるものは3棟で、他は後・晩期どの時期に属するか今のところ不明である。形状は大略円形で規模は径2.5～4.5mほどであるが晩期の住居址では径5mほどのものもある。炉は石囲炉が最も多く、その他配石炉、地床炉がある。これらの住居址の大半は重複やピットとの切り合いである。また占地在斜面部のため南側は削剥され不明なものも多い。屋外炉や焼土遺構は昨年の調査では1基だけで、他は本年度調査のものである。屋外炉には長さ96cm、幅44cmなどの大形の扁平な礫を二の字形に配置し、焼土が厚く形成されているものがあつた。この礫はかつて台石として使用されたらしく両面に使用痕がみられた。ピットは昨年調査の東側では1基しかなく、本年度調査のものが54基である。斜面部にも点在するが、その多くは鞍部を取囲むように占地している。形状はフラスコ形のものが多い。鞍部西側に検出された大型のピットには最大厚30cmの焼土が投げこまれ、埋土から縄文時代後期末葉に位置づけられる土器が多数出土した。陥し穴状遺構は本年のみの調査で、いずれも長軸方向が等高線に平行しており、底面が両端にのび、壁面がオーバーハングしている。

<近世の遺構>

中央尾根東斜面・後線部・南斜面、北尾根南斜面等に1.5×1.0mほどの隅丸長方形素掘の炭窯が検出された。全部で28枚ある。そのうちには長軸が10mや15mなどの極めて細長いものがある。昨年調査では南斜面沢沿いに密鉄鑄造場跡が確認されている。

<遺物>

縄文時代の遺物は全域にわたって出土しているが、特に中央尾根南斜面ではその量が多い。

縄文後期の土器では初葉・前葉の時期のものが最も多く「前十腹内式」「十腹内」式併行と思われる。末葉のものは若干である。器種は深鉢、浅鉢、壺、台付鉢、注口土器などである。小型の蓋付壺は、蓋を紐でおさえ得るように紐を通す穴が蓋・本体双方に対応してついていた。縄文晩期の土器の出土量は多くないが大洞BC式に併行する精製と粗製の土器が住居址床面から出土している。土製品としては罎形土製品、円盤状土製品、きのこ形土製品、土偶などが出土している。石器類の出土は比較的少ない。搔器、石匙、石鎌、十文字刻線つき石弾、凹石、磨石、台石などである。

奈良時代の遺物は北尾根や西尾根から出土している。コタロ未使用の土師器で、坏は段を有し丸底のものが有り、内黒処理されたものもある。甕は球形のものが多い。コシヤ、土製紡錘車、石製紡錘車、鉄製鎌なども出土した。

3 ま と め

以上地区毎に述べたものを、時代順に整理すると次のようになる。

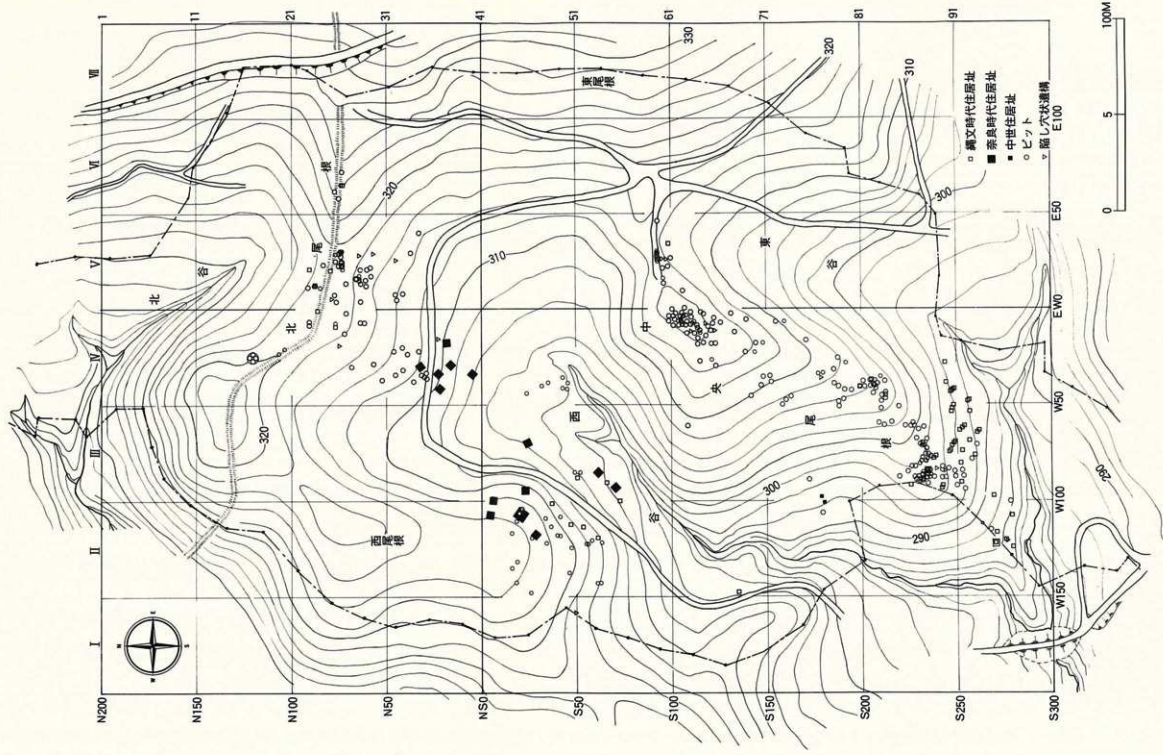
縄文時代後期前葉には、中央尾根南斜面に大きな集落があり、それに伴うと思われるピットが背後の稜線部につくられた。後期末葉では北尾根に集落が営まれ、それに伴うと思われるピットが稜線部から南側斜面にかけてつくられ、またこの時期に中央尾根南斜面に再び小集落がつくられた。西尾根南東斜面にも縄文後期頃集落があったが、細かい時期は現段階では不明である。

縄文時代晩期には、中央尾根東側や西谷右岸、中央尾根南斜面などに比較的大型の住居址が点在した。そしてそれぞれの立地場所によって時期の違いがみられる。

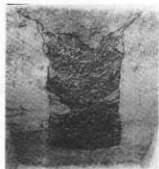
奈良時代になって北尾根南側緩斜面や西尾根頂部南端とその下位の西谷右岸などに集落が営まれたが、全て焼失してしまった。

中世になって中央尾根西側緩斜面に住居址がつくられている。その後、この地が居住地となることがなく、密銭鈔造の場や炭焼きなどの林業地、馬の放牧地に利用されるなどして現在に至ったものと思われる。

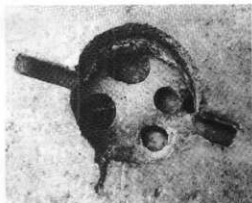
本遺跡は広大な面積を調査対象としたこともあって、各時代・時期における集落立地のあり方や集落変遷の様子、時期別の集落構成と遺構のかかわり、近世末の密銭鈔造の様子などを解明する貴重な成果を得ることができた。



狗塚遺跡遺構配置略図



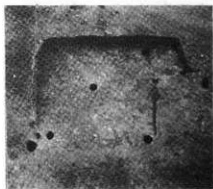
ピット埋土断面



複合ピット



奈良時代竪穴住居址



中世住居址



縄文式土器出土状況



縄文時代竪穴住居址

駒板遺跡

縄文後期土器



蓋付土器



土製品



奈良時代土器

縄文晩期土器



駒板遺跡出土遺物

(3) 小井田Ⅲ遺跡

遺跡所在地	二戸郡一戸町一戸字小井田53の1
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年4月11日～7月31日
調査対象面積	8,000㎡
発掘面積	8,000㎡
遺跡記号	KDⅢ83
調査担当者	専門調査員 田鎮寿夫・折沢満郎
協力機関	一戸町教育委員会



小井田Ⅲ遺跡位置図

1 遺跡の立地

本遺跡は、岩手県二戸郡一戸町字小井田内に所在する。東北本線一戸駅から北直線距離にして約2kmの位置である。

一戸町は、岩手県の北部に位置し、町の西方に南北に縦走する奥羽山脈を配し、東方には、北上山地の最北端の山岳が高原状に連なり、起伏に富んだ地形を呈している。

本遺跡の立地に関わりの深い馬淵川は、この二つの山系の間を北流し、青森県八戸市を経て太平洋に注いでいる。本遺跡の立地する付近においては、この馬淵川が調査区域の西方およそ650mの位置を北流し、川岸の両側にいくつかの河岸段丘を形成している。遺跡は、馬淵川東岸の洪積世低位段丘面に載っている。調査区域の標高は、148m～183mであり、馬淵川からの比高は、25m～60mである。

2 調査の概要

本調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査区域は、一戸インターチェンジ用地内に含まれる14,380㎡が対象面積である。

調査は、昨年度(1982年)と本年度(1983年)の2ヶ年に亘る。昨年度は、6,380㎡の調査を行い、残り8,000㎡を今年度調査した。

昨年度の調査は、調査区域の東側に位置する標高170m～183mの段丘面で、検出した遺構は、ピット3基、陥し穴状遺構54基である。

本年度の調査は、調査区域の西側にあたる標高148m～162mの面である。今年度の調査地区の地形は、北端部の平地地(1,300㎡)とその西に隣接する西斜面(1,500㎡)、南側の平地地(4,000㎡)、東側の崖上に位置する段々畑末端の西斜面に4区分される。このうち東側崖上に位置する西斜面からは、遺構、遺物の出土をみなかった。

検出した遺構は、竪穴住居址、及び住居址状遺構7棟、ピット55基、陥し穴状遺構21基、江戸期と推定される墓塚1基、掘立柱建物跡である。

<竪穴住居址>

検出した竪穴住居址の時期は、縄文早期2棟、縄文中期1棟、弥生3棟、住居址状遺構1棟である。

縄文早期住居址は、2棟ともに、調査区北端部の平地地に位置する。平面形は、ともに円形である。規模は、1棟は直径3.8mである。炉や柱穴等は認められない。床面から縄文早期尖底土器(写真上段左・中)が出土している。なおこの住居址を陥し穴状遺構が切り込んでいた。他の1棟の規模は、直径5.7mである。炉は認められない。柱穴は12ヶ検出した。床面から縄文早期尖底土器片等が出土している。

縄文中期、弥生期の竪穴住居址4棟は、すべて調査区域南側の平地地に位置している。この住居址のうち3棟は、各々の掘り込み面と埋土が同質、同色のため、その識別がつかず、規模

・形状について不明な点がある。4種の住居址にはそれぞれの床面のほぼ中央付近と考えられる位置に、4～6ヶの礫を用いた石囲炉が設けられている。

<ピット>

本年度検出したピットは、55基である。検出した位置は、北端部の平坦地、その西に隣接する西斜面、南側の平坦地にわたっているが、39基は、西斜面に集中している。

規模は、検出面での直径が2m以下のものがほとんどで、深さ80cm前後のものが多く、断面形は、ピーカー型のものが多く、

<陥し穴状遺構>

本年度検出した陥し穴状遺構は、21基である。昨年度の調査によって54基を検出しており、合せて75基を検出している。

本年度検出した21基のうち20基は、北端部の平坦地に築かれている。平面形は、細長い溝状乃至長楕円形である。短軸の断面形は「U」字状、ロート状、逆台形状の三種類に大別される。

<出土遺物>

縄文時代早期遺物を中心に、縄文中・晩期、弥生土器が出土している。縄文早期の遺物は、北端部の平坦地に分布し、ほとんどの遺物を八戸火山灰上面で検出した。

縄文中・晩期、弥生土器は、南側の黒色を呈する堆積土中から検出した。出土した遺物を量的に見ると、縄文晩期のものが極めて少ない。

縄文時代早期土器の器形は、確認できたものすべてが尖底土器である。文様の施文方法を見ると、貝殻によって施文されたものが多く、これに刺突文、貝殻文と沈線を組み合わせて施文したものが混じる。

石器類の出土は、礫石器と剥片石器が約2：1の割合で出土している。石器の出土も、調査区北端の平坦地が多い。器種では、三角柱状の自然礫の側面に磨痕を有する磨石や凹石、扁平楕円体状の磨石、敲石などが比較的多く出土している。他に、礫石鏃、石筥等が出土している。

3 ま と め

調査区域の北側平坦面から縄文時代早期2棟を検出し、さらに同じ検出面から縄文時代早期土器片が多数出土したことは、現在、県内において他の時期と比較して早期の遺構や遺物の出土が少なく、貴重な資料といえる。

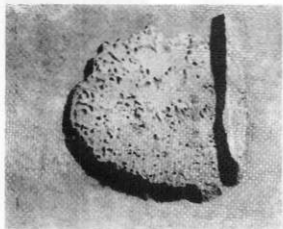
本年度の調査によって陥し穴状遺構を21基検出したが、これは、昨年度検出した54基の陥し穴状遺構と同じタイプであり、一連の遺構と考えられ、その配置のしかたに興味深いものがある。



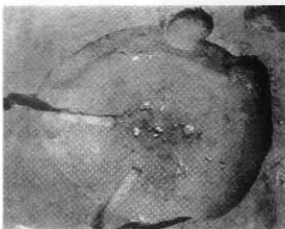
小井田Ⅲ遺跡遺構配置図



1983年度調査区域全景航空写真（東上空）

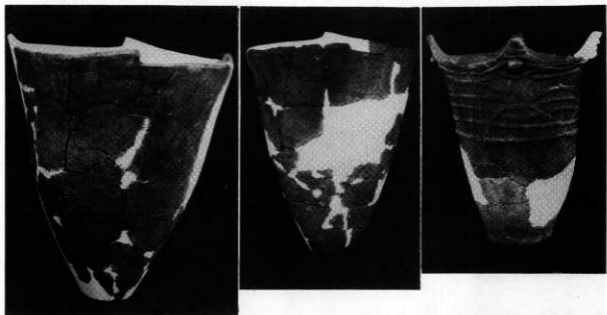


1号住居址（縄文時代早期）



2号住居址（縄文時代早期）

小井田Ⅲ遺跡

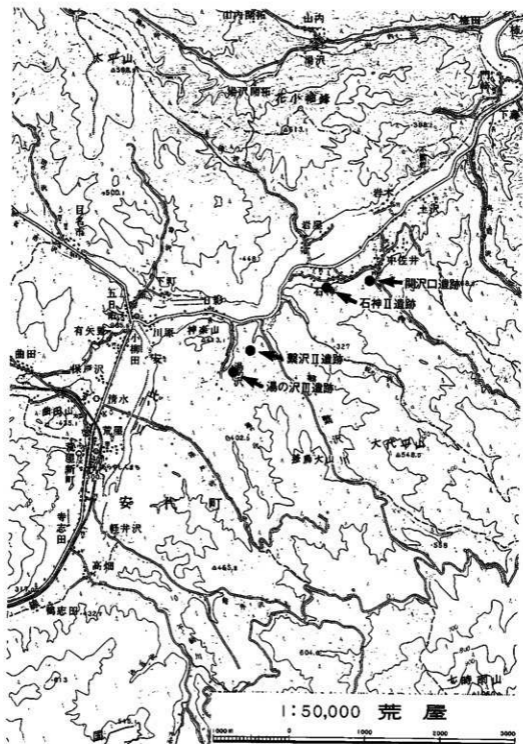


小井田Ⅲ遺跡出土遺物



(4) 湯の沢Ⅲ遺跡

遺跡所在地	二戸郡安代町字湯の沢88
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年6月1日～8月18日
調査対象面積	9,100㎡
発掘面積	9,100㎡
遺跡記号	YSⅢ83
調査担当者	専門調査員 佐々木嘉直・佐々木清文
協力機関	安代町教育委員会



湯の沢Ⅲ・繫沢Ⅱ・石神Ⅱ・関沢口遺跡位置図

1 遺跡の立地

本遺跡は、安代町役場の北東約2.3kmに位置し、北流して安比川に注ぐ湯の沢右岸の緩斜面に載る。この緩斜面は、七時兩山地の北西山麓地にあたる丘陵末端付近の標高305～320mの西斜面であり、大部分タバコ畑として利用されている。調査区域の大半は人為的削平を受けた地形面である。近くには葉沢Ⅱ、日影Ⅱ遺跡がある。

2 調査の概要

検出した遺構は、縄文時代竪穴住居址4棟、陥し穴状遺構5基、ピット30基、焼土遺構9基、石囲炉址1基である。遺構の80%は人為的削平を受けなかった南西端の牧草地部分に集中している。一方削平の著しい中央部では遺構、遺物とも極端に少ない。

<竪穴住居址>

竪穴住居址は4棟とも縄文時代のものである。時期は中期に属するもの3棟、不明1棟である。中期に属する3棟は、平面形が楕円形で規模は平均3.1×2.6mである。2棟は土器埋設炉を有しており、1棟では炉は検出されないが埋設土器が壁際にある。柱穴は不明である。出土遺物は埋土から得られたものが多いが、円筒上層c式、大木8a式に分類されるものが多い。時期不明の1棟は平面形が円形で規模は2.6×2.6mである。なお、調査時点で地床炉をもつ住居址と考えた2棟は、床面や壁の立ち上がりなど不明確な点が多く、最終的に焼土遺構とした。

<陥し穴状遺構>

検出された5基の陥し穴状遺構には、埋土上位に、十和田a降下火山灰と思われる浮石混じりの土層がみられる。このうち4基は、長軸方向がE-W又はNW-S E方向を示し、遺跡南西端から北東方向に一直線に並んでいる。平面形は長楕円形である。規模は、長さ2.4m・幅1.2m・深さ1～1.5mである。特に底部の形状や規模は同じである。2基の埋土から縄文時代中期の土器片が得られている。長軸方向がNE-SW方向を向く1基は形態、規模などの点で前者と異なっている。

<ピット>

ピットは30基検出された。平面形は円形を基調としている。検出面からの深さが50cm以上あるもの15基の断面形はビーカー形やフラスコ形が多く、埋土から縄文時代中期の土器片が得られているケースが多い。浅いピットの場合出土遺物は少ない。

<焼土遺構>

焼土遺構は9基（焼土ピット1基を含む）である。8基までが住居址の検出された付近に分布している。斜面上位2基、斜面中位2基、斜面下位4基である。

<石囲炉址>

中期の3棟の住居址の間で検出されている。粒径10～30cm前後の礫を円形に配置したもので

ある。焼土形成は殆どみられない。

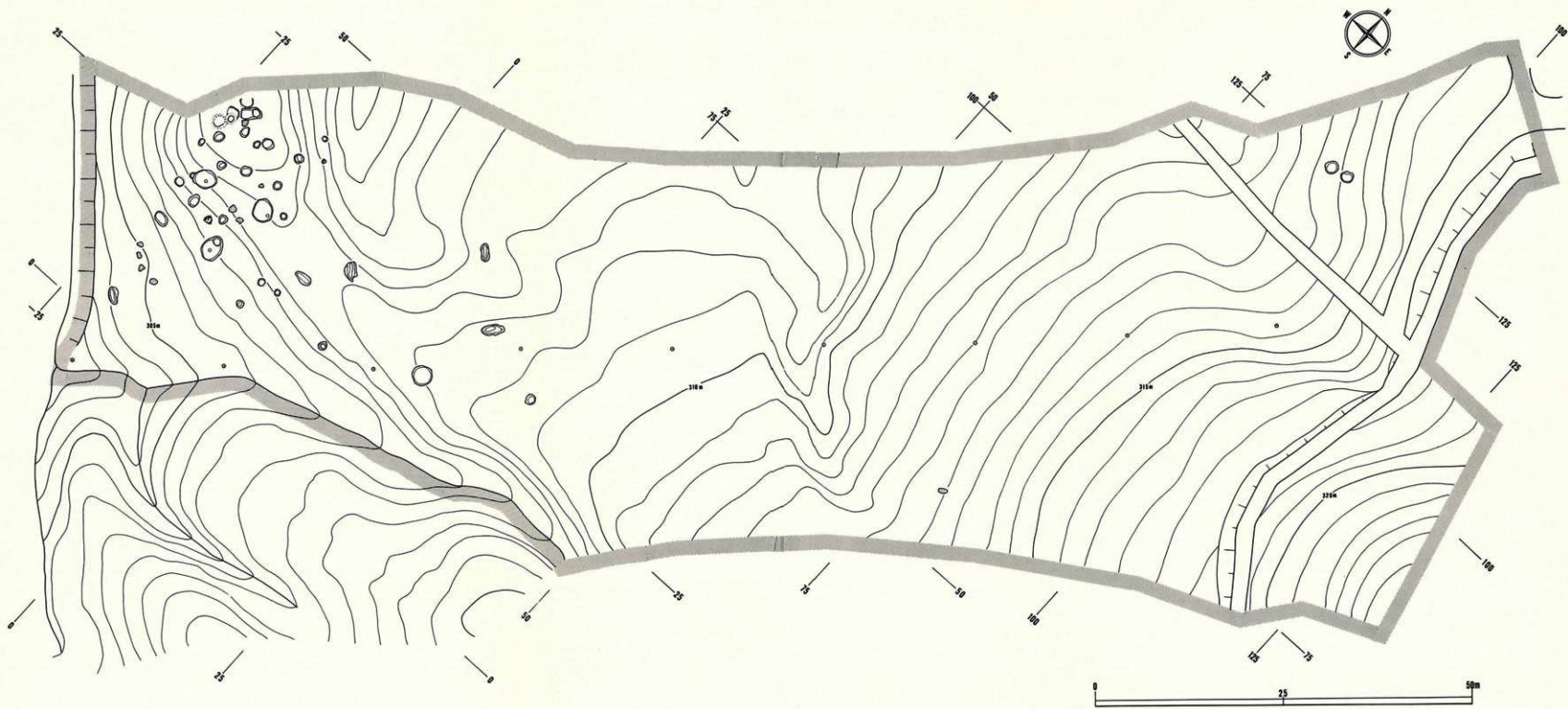
〈出土遺物〉

全体的に遺物の出土量は少ないが、90%以上が南西部の遺構集中地域から出土している。

土器は殆ど縄文時代中期のものであり、円筒系が多く大木系は少ない。円筒系では上層 a・c 式に分類されるものが多く、上層 d 式は少ない。大木系土器は 7 b、8 a 式に分類されるものである。石器には石鏃、石匙、石筥、スクレーパー、石斧、凹石、磨石、石皿、台石などがある。また未加工の角状石材が多く出土している。土製品には有孔土製円盤がある。

3 ま と め

今回の調査区域は人為的削平を受けた地形面であったこともあり、遺構や遺物は意外に少なかったが、検出された遺構群は調査対象地区の南西端の沢に囲まれた舌状の緩斜面に集中している。このことは安代地区における遺跡立地を考える上で参考になると思われる。また、安代町の調査結果をみると、円筒土器の出土例は比較的少ないが、今回の調査では円筒系と大木系の土器が出土しており、縄文時代中期における文化圏の関係を知る手がかりとなる。湯の沢周辺から円筒下層式土器が出土しており、今後の安比川中・下流域の調査が注目される。



湯の沢Ⅲ遺跡遺構配置図



遺跡風景



BH29住居址



BF33・33-2ピット



CC34陥し穴状遺構

湯の沢Ⅲ遺跡



湯の沢Ⅲ遺跡出土遺物

(5) 繫沢Ⅰ遺跡

遺跡所在地	二戸郡安代町字繫沢58-35
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年4月19日～5月31日
調査対象面積	7,940㎡
発掘面積	5,000㎡
遺跡記号	TSⅡ83
調査担当者	専門調査員 佐々木嘉直・佐々木清文
協力機関	安代町教育委員会

1 遺跡の立地

本遺跡は安代町役場の北東約2.8kmに位置し、北側を安比川が北東に流れ県道二戸・安代線が通る。遺跡は七時雨山地の北西山麓地にあたる丘陵地末端付近の緩斜面に載る。この緩斜面は粟沢川と安比川の合流点から南へ300m位入った北西向きの斜面で、調査範囲の標高は305m～315mである。安比川との比高は30m以上である。調査範囲は中央付近を流れる小沢によって2分され、北半分は牧草地、南半分は畑地として利用されていた。

斜面下位には日影Ⅱ遺跡、南側の反対斜面には湯の沢Ⅲ遺跡がある。

2 調査の概要

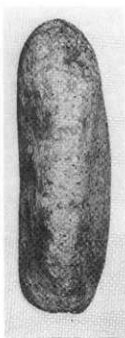
調査は、調査範囲の北端からはじめ、順次南に進めた。その際、斜面下位は全面検出したが、湿地や湧水の多い斜面上位は、幅1m又は2mのトレンチで検出した。南半分の牧草地は、人為的に削平して造成されており表土は10cm位であった。北半分の畑地は沢を埋めて造成されていた。遺構は全く検出されなかったが、縄文時代の土器片や石器が少量出土している。前期の土器片は、中央部付近の畑地から出土したものであり、口縁部と体部の境界に隆帯を有するものである。中期の土器片は、南半分の牧草地から出土したものであり、太い沈線や磨削し帯を特徴とするものである。石器は表採したものである。

3 まとめ

本遺跡は人為的攪乱を大きく受けた地形面であり、遺構は検出されなかったが、地表水や湧水などの流れを考えると遺構は存在しなかった可能性が強い。従って調査地は遺物散布地ということになろう。

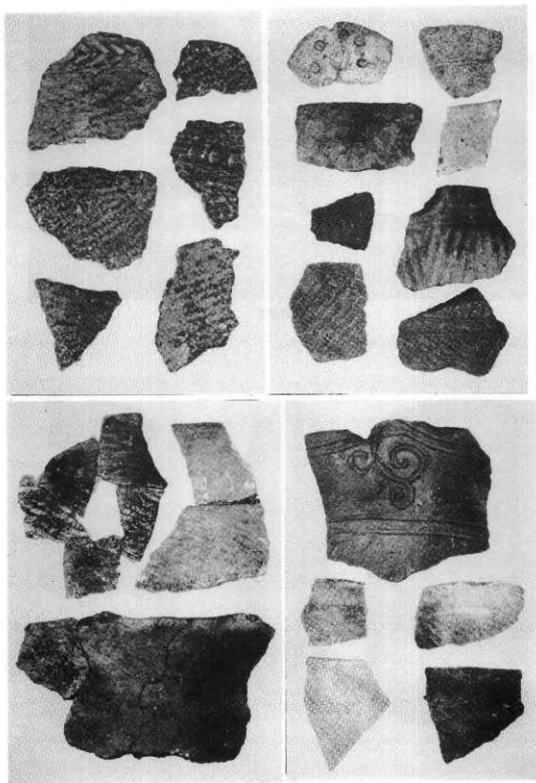


遺跡風景



出土遺物

繁沢Ⅱ遺跡



出土遺物

繁沢Ⅱ遺跡

(6) 岩神Ⅱ遺跡

遺跡所在地	二戸郡安代町字石神9-2
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年8月19～9月17日
調査対象面積	2,450㎡
発掘面積	2,450㎡
遺跡記号	I G Ⅱ83
調査担当者	専門調査員 佐々木嘉直・佐々木清文
協力機関	安代町教育委員会

1 遺跡の立地

本遺跡は、安代町役場の北東4km程度の地点に位置し、安比川右岸に形成された段丘上に立地している。この段丘は南側で山麓の緩斜面に接し、緩斜面に沿うように旧県道が通り、集落が形成されている。また、北側の段丘崖の下には県道二戸・安代線が通っている。

調査地は段丘上に立地する遺跡のなかでも山裾に近い部分で、南側には山裾に沿って流れる用水路があり、東側の沢からの水と合流して北に流れる。西側には湧水があり、現在は簡易水道源として利用されている。

旧県道の北側には中世城館址である石神館跡があり、旧県道との間には空堀がある。

2 調査の概要

調査区域は調査前までリンゴの栽培が行われていた。表土は10cm～30cmの厚さで、表土直下の褐色土上面が遺構検出面となった。しかし調査区域内から遺構は検出されなかった。旧地主によれば、旧県道に近い方の現在のリンゴ園内で、リンゴの植樹をする時に土器や焼土が出たとのことで、遺跡の主体は調査地の北側のリンゴ園中と思われる。

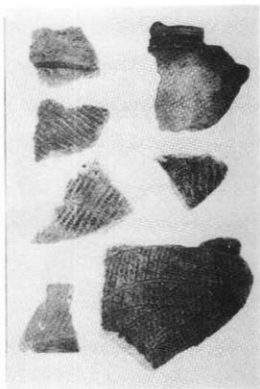
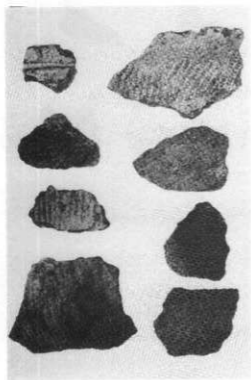
出土遺物としては、縄文式土器片・陶器片・鉄製品・古銭が各々少量ずつ得られている。縄文式土器片は縄文時代中期～晩期のものである。陶器類は甕や摺鉢の破片が多い。古銭は新寛永通寶銅一文銭と鉄一文銭である。

3 まとめ

遺物は縄文式土器片から近世の陶器片まで出土しているが、遺構は検出されていない。遺跡の主体は上述のように調査地北側のリンゴ園中と思われ、その時期も旧県道を挟んだ北側の中世城館址である石神館跡との関係から、縄文時代から中世ごろまでの遺構が存在すると考えられる。

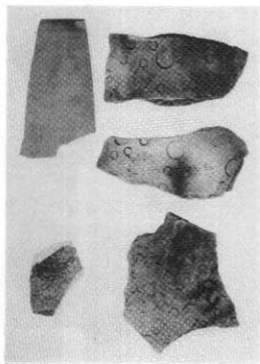
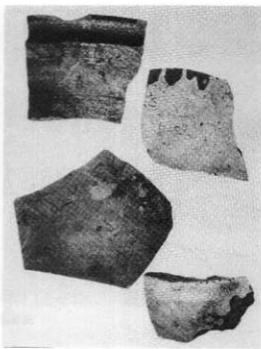
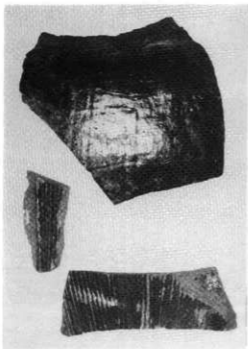


遺跡遠景



出土遺物

石神Ⅱ遺跡



出土遺物

石神Ⅱ遺跡

(7) 蘭 沢 口 遺 跡

遺跡所在地	二戸郡安代町字蘭沢口
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年9月19日～10月31日
調査対象面積	13,900㎡
発掘面積	10,000㎡
遺跡記号	S S G83
調査担当者	専門調査員 高橋与右衛門・玉川英喜
協力機関	安代町教育委員会

1 遺跡の立地

本遺跡は、国鉄花輪線荒屋新町駅の北東方向約4.3kmに位置し、荒屋新町から県道二戸・安代線を約4kmほど進んだ中佐井地区から南東方向に、田代山(標高945.4m)中腹に至る関沢林道を200mほど南進した所にある。遺跡は田代山から西へ延びる2本の尾根に挟まれた関沢によって形成された谷間の小規模な崖錐性扇状地の扇頂部に立地している。この扇状地はさらに関沢に注ぐ小さな沢によって開折されて、若干の起伏をもっており、調査によっても何本かの埋没谷が検出されている。全体としては北東向きの緩斜面となっているが、関沢から分かれて遺跡のほぼ中央を横切る沢と、これに流れ込む沢のために、遺跡の西から北側にかけては東向き、東から南側にかけては北西向きの斜面を形成している。関沢はさらに1kmほど北流して安比川に注ぐ。遺跡の標高は315m前後で、付近の尾根とは30~40m、関沢の河床とは4~5m、安比川とは約70mの比高がある。周辺には湯の沢Ⅲ遺跡、水神遺跡(未調査)等がある。

2 調査の概要

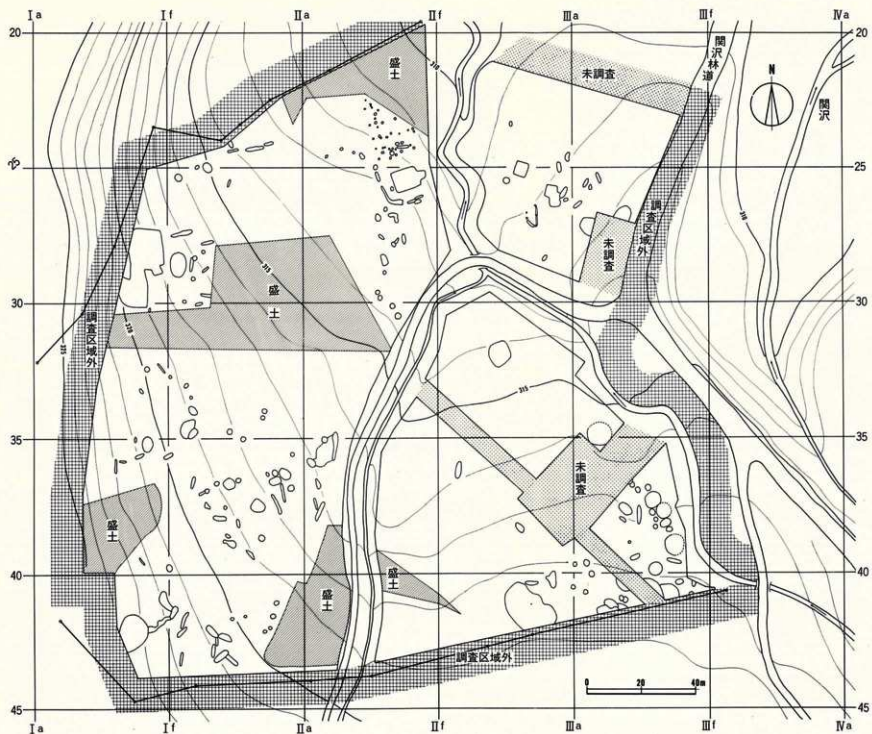
本調査は東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査対象面積は13,900㎡であるが、今年度は用地問題未解決部分などを除いた10,000㎡について粗掘し、遺構検出を行なった。残る3,900㎡の粗掘及び全面精査については来年度に行なわれる予定である。

調査は、表面採集遺物の多い地域は人力で、少ない地域は、2m幅のトレンチを地形を異にする地域ごとに1~3本づつ入れて層位などを確認した後、バックホーを用いて粗掘し、その後遺構検出を行なった。その結果、住居址及び住居址状遺構23棟、土坑類99基、陥し穴状遺構58基、柱穴状小土坑39基、溝状遺構3基、鏡土2基、不明1を検出した。住居址及び住居址状遺構は調査区域南端東側に集中している。また陥し穴状遺構及び土坑類は調査区域西側に多い。

出土遺物は少なく、土器は破片が大半で復元可能なものは2~3個体にすぎない。石斧、石鏃、石匙などの石器や石製品も十数点しか出土していない。出土した土器の時期は、縄文時代前期、中期、後期、晩期と弥生時代、そして平安時代の土器と各時代にわたり、また舶載の青磁碗の破片もある。

3 まとめ

今回の調査では精査を行なわないので確定的なことは言えないが、出土遺物から、縄文時代から中世までの長い時代にわたる複合遺跡の可能性を持っている。今後の調査結果いかんでは県北地方の時代の変遷を示す良好な資料となりうらと思う。



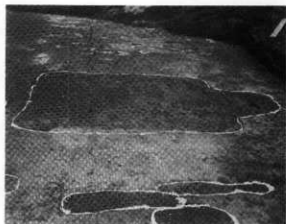
関沢口遺跡遺構配置図



遺跡通景（検出後）

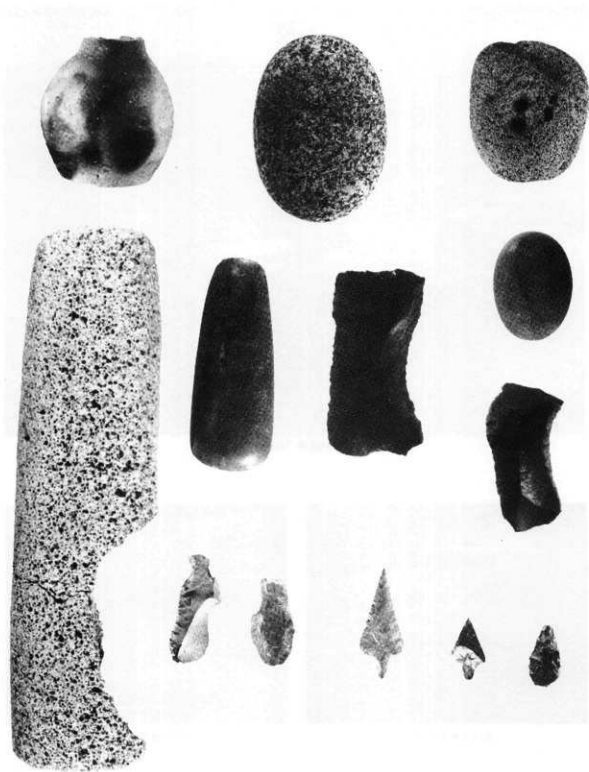


III D区遺構検出状況



II C区遺構検出状況

関沢口遺跡



関沢口遺跡出土遺物

Ⅵ 市 町 村 関 係

(1) 湯舟沢遺跡

遺跡所在地	岩手郡滝沢村大字滝沢第10地割字湯舟沢
委託者	滝沢村
調査期間	昭和58年4月11日～10月28日
調査対象面積	11,040㎡
発掘面積	11,040㎡
遺跡記号	YH83
調査担当者	専門調査員 菊池利和・朝野孝二・高橋義介
協力機関	滝沢村教育委員会、トーマン住宅開発株式会社



湯舟沢遺跡位置図

1 遺跡の立地

湯舟沢遺跡は、滝沢村役場から北北東5kmの位置にある。西に比較的起伏の大きい丘陵性山地(450~550m)が連なり、その奥10kmには岩手山(2,041m)が聳えている。東方には諸葛川、木賊川及び北上川が南流している。この丘陵性山地から二つの台地(230m前後)が、本遺跡を挟むように東に張出している。その台地から小さな沢を集めて東流する市兵衛川(諸葛川の支流)が湿地帯を形成しつつ、やがて南流する。本遺跡は、市兵衛川の湿地帯を挟んで、兩岸に形成された沖積段丘面に立地している。遺跡の標高は180~190mである。周辺の遺跡としては、木賊川、卯達坂、根堀坂、けや木の平地遺跡などがある。

2 調査の概要

本遺跡の調査は、宅地造成計画の具体化に伴い、滝沢村から委託を受けての緊急発掘調査である。本年度の調査は、昨年に引き続き第二年度の調査であり、5区、6区の東区域及び7区の計11,040㎡を対象に行なった。調査の結果、縄文堅穴住居址30棟、平安堅穴住居址2棟、堅穴状遺構2基、焼土及び炉址遺構34基、ピット8基、陥し穴状遺構14基を検出した。以下遺構と遺物の概略を述べる。

<堅穴住居址>

5区では、縄文住居址24棟(後期11、晩期12、不明1)が検出された。後期の住居址は、径3.0~5.3mのほぼ円形で、炉は、地床炉又は数個の竈を配置した炉で壁の一方に寄るものが多い。床面は黒色土の中~下位にある。柱穴は検出されないものが多く、柱穴配置の傾向は把握できない。晩期の住居址は、径3.5~5.5mの円形~楕円形であるが、晩期末葉のやや大形化する楕円形のを除けば、ほぼ後期の住居址と同程度の規模である。炉は住居址のほぼ中央に設けられ、殆どが石囲炉となる。床面は黒色土中において縋りなく、柱穴の多くは床面を掘り下げ検出している。晩期末葉の住居址では、埋土上部に5~10cmの厚さで堆積する白黄色火山灰が検出されている。

6区では、東の沢寄り及び中央部南寄りに縄文住居址6棟(中期末~後期初頭1、後期2、晩期1、不明2)が検出された。後期初頭の住居址(XI T h-2住)は中央部に複式炉をもち、壁ぎわに貯蔵穴が設けられている。晩期の住居址(XII S f住)は、壁近くに地床炉があり、貯蔵穴が2基検出されている。

7区では、南側の緩斜面上に平安住居址2棟が検出された。XIV U c住居址は4.9×4.1mの歪んだ長方形で、カマドはなく、中央やや南寄りに地床炉がある。西~南の壁際に浅い周溝が設けられている。柱穴は4ヶ検出されている。床面出土の坏底部片にはロクロ使用痕がある。

<堅穴状遺構>

6区の東側地域で2基検出している。1基は楕円形で出土遺物から縄文後期に所属すると思われる。もう1基は長方形を呈し、出土遺物がなく時期不明である。

<ピット>

5区、7区で各1基、6区で6基検出している。7区のピットは埋土中に径2～5cmの礫が300個ほどあり、墓塚と思われる。6区では、径1.0m深さ1mの3基は貯蔵穴と思われるが、他の楕円～方形のものは性格不明である。いずれのピットも、出土遺物がなく時期は不明である。

<陥し穴状遺構>

6区で14基検出している。楕円形のもの（約2.0×0.8m規模）と溝状のもの（2.5～3.5×0.5m規模）があり、深さは約1mを測る。出土遺物はない。

<焼土・炉址遺構>

5区で19基、6区で9基、7区で6基検出している。5区では、中央部に集中するように位置しており、検出面の上位、下位で縄文後期の土器が多く出土しているが、遺構に直接関連するものは少ない。

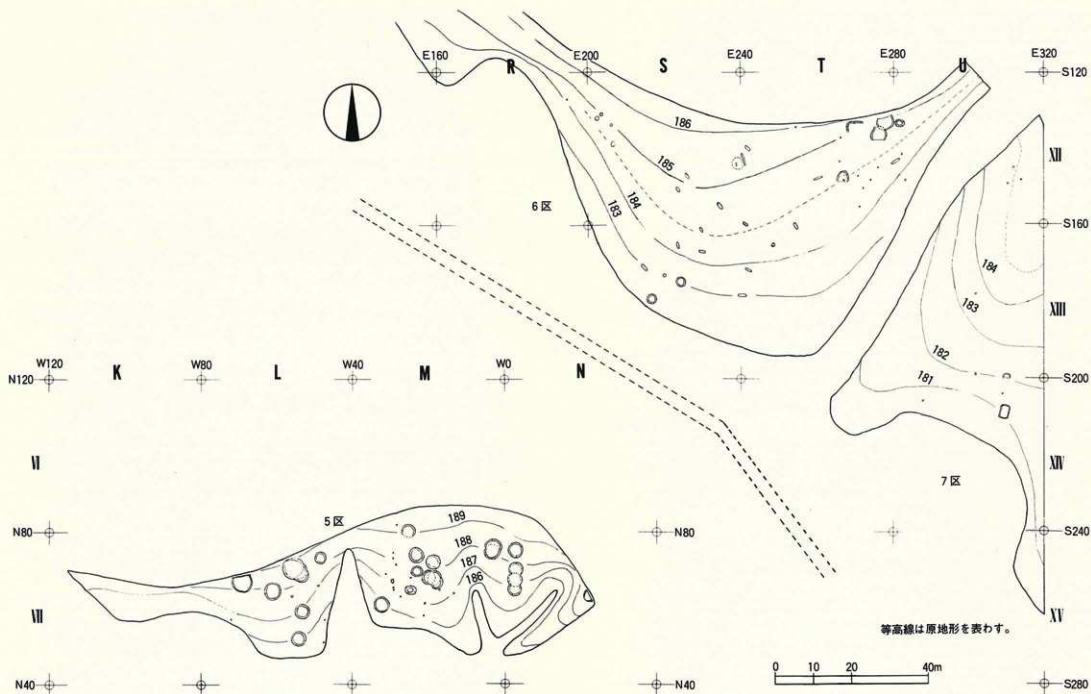
<出土遺物>

遺構に伴う土器として、縄文時代後期の注口土器・鉢・深鉢・ミニチュア土器、晩期の高杯・注口土器・壺形土器・鉢・深鉢などがある。遺構外のものでは、縄文後期～晩期のものを中心に、縄文早期、前期の土器、弥生式土器、土師器など少量であるが出土している。石器では石鏃・石匙・搔器・石斧・磨石など多く出土している。土製品では、土偶・腕輪・耳栓・鐙形土製品などがある。

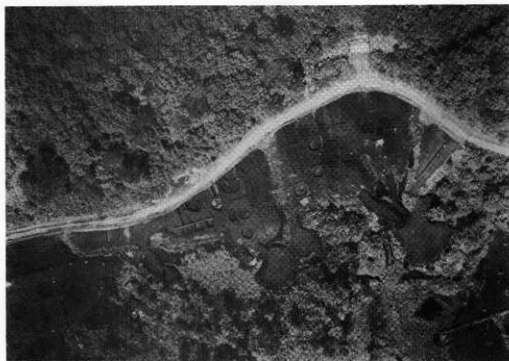
3 ま と め

昨年及び本年度の調査によって検出された遺構は、遺跡のうち当センターが担当した5、6、7、9、10区で縄文時代住居址30棟、平安時代住居址9棟、竪穴状遺構4基、焼土・炉址42基、ピット16基、陥し穴状遺構18基である。遺構の多くは市兵衛川左岸の山を背にした南緩斜面に立地することが判明した。時期別にみると、縄文後期には6区東側の沢寄りの地域と5区のはほぼ全域に、縄文晩期には5区西、東のやや沢寄りに立地する。平安時代には6区北西部の段丘縁にやや集中し、立地している。

2年間に亘る当センターと滝沢村教育委員会との調査によって、湯舟沢遺跡が縄文時代早期から平安時代に跨がる遺跡であり、そのうちでも縄文後期、晩期、弥生時代（滝沢村教委の調査区で、弥生住居址が10数棟検出されている。）には、生活根拠地として最も活用されたことが判明し、多くの貴重な資料が得られている。



湯舟沢遺跡遺構配置図



5区全景（南上空から）



ⅥLk住居址（縄文晩期）



ⅥMf住居址（縄文後期）

湯舟沢遺跡



湯舟沢遺跡出土遺物

岩手県埋文センター文化財調査報告書第75集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和58年度分)

昭和59年2月24日印刷

昭和59年2月29日発行

発行 財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡南村大字下飯岡第11地割字高屋敷

TEL (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 富士屋印刷所

〒020 岩手県盛岡市下ノ橋町2番9号

TEL (0196) 23-6391
